「守護天使は願わない」

◇0—1

「極端な話をするがね。彼らは現代の妖怪、電子の付喪神(つくもがみ)だ」
講談師の様に抑揚のある声は胡乱な内容をつらつらと語る。
妖怪——つまるところ、人知を越えた不可思議な力を持つもの。
付喪神——長い時間経て、道具に霊魂が宿り、動き出すもの。
「そして、その二つの共通する本質は変化(へんげ)なんだよ」
変化——へんげ……本来の姿ではない、ばけもの。
「彼らは形なきもの……非物質から変容し、魂を備えた生物らしき形態を取る。その有りようは、正しく前述した二つに当てはまる」
そこで一区切りとばかりに、かの男は息を大きく吸い、ゆっくりと吐いた。

「私たちは……彼らに出会ってしまった」

抑揚は同じだが、声のボリュームを下げて、今度は怪談話をするように語る。
「その邂逅は不幸かもしれない。我々は、もう二度と元の生活には戻れないだろう」
男の視線は慈しむ様な、あるいは哀れなものを見るような目つきだった。
——つまるところ、この男はこの先の未来を案じているのだ。
もはや、平凡な日常には後戻りは出来ない……そう告げているのだ。
「……だからこそ共に歩もうではないか。この暗黒のすそ野を。人類未踏の領域……その最前線を!!」
再び、声が熱を帯びて、音量が上がる。
「私たちが、それについて知っていることは、わずかしかない……」
そして、マエストロが指揮棒を振り上げ、楽団に演奏の開始を告げる直前の様に、しばしの沈黙……溜めを以てから、口を開いた。
「だからこそ、我々は知るべきなのだ、彼ら電脳的な怪異……」

——デジタルモンスター……デジモンについて!!

話し手——『教授』が勇ましい声を上げた。それは己を鼓舞する意味合いもあった。

◇1

串木野（くしきの）やよいは――ちやほやされたかった。

それはよくある話なのかもしれない。

所謂、地方社会の中流家庭で、眉目秀麗な妹がいて、姉であるというだけで比べられるという、ありがちな話。

『私は下の子だけが取り柄なんです』

妹のお世辞を親族に吹聴して歩く母親と、それに対して何の反論もしない父。そんな両親を見て、彼女は育った。

これが何かの物語ならば、やよいに何らかの才を見いだした誰かが……彼女を救い出して一発逆転……なんて奇跡もあったのかもしれない。

けれども現実は違う。

『もう、やよいちゃんはお姉ちゃんだからお年玉は要らないよね？』

そんなことを言って目の前で、妹が、言葉に反する、厚めのポチ袋を貰った時の光景は……今でも、目に焼き付いている。

そして、親族の皆は、母の言葉を真に受けて、下品な笑いを浮かべて妹をはやし立てるのだった。

それが血族間だけならば、まだ、救いがあったかもしれない。

閉じた地域社会では、どこそこの家の話題なんてものは、学生の間では一つのコンテンツとして扱われる。

だから、やよいの立場は誰の知る所でもあった。

結果、何の取り柄も無い彼女に好意を寄せる人間はいなかった。

彼女は透明人間だった。

その場に存在しない……ほとんど、空気の様な扱いを受けた。

唯一、幸運と言えたのは、そういう立場であったため、いじめ等で何らかの被害受ける事が無かったこと……ぐらいだろうか。

そんな空虚な日々の中で、誕生日のケーキを……自分一人で買いに行った日に……彼女は決意を固めた。

串木野家の全ては、やよいの妹を中心とした円環だった。

自分はその輪の中には入れない。無理して入ろうとも思わない。

だから、その中から……抜け出そうと心に決めた。
だから、やよいにとって物心が付き、成人し、家を出るまでの十数年間に安らぎは無く、何ら良い思い出は無い。
彼女本人も、なんて空虚な人生なんだ……と我が身を振り返る。
だからこそ、飢えていた。
愛に、喝采に、自分に向けられる好意的な感情に――俗っぽく言えば……
ちやほやされたかったのだ。

そんな彼女は紆余曲折あって、たどり着いた場所は……
「こんぱんぱかぱーん！　巻髪ぱんなだよー」
Ｖｔｕｂｅｒ――アニメ風のイラストで描かれたキャラクターの姿を借りて、動画サイトで配信を行い、収益を得る職業。
活動名は『巻髪ぱんな』
頭部に雌山羊の角を備え、ピンク色の長い髪の毛と、ゆったりとした布服を着た少女である。
大手事務所に所属し、動画サイトの彼女のチャンネルは、登録者数が百万人を越えている。
――自画自賛するならば……世間の認知度はかなりのものだと思っている。
配信を行う度に何百……時には何千、何万と、動画内でコメントが飛び交う人気を誇っている。
例え、それが作られた偶像だとしても、やよい本人に向けられたメッセージでなくとも……喋り、活動し、人の心を掴んだのは演者である、やよい本人があってこそ。
だから、やよいは巻髪ぱんなになれた事で、ようやく過去の埋め合わせ――誰かから愛されている、と実感していた。

そんな風に思えるようになった矢先――奇妙な出来事が起きた。

やよいの目の前で……巻髪ぱんなが勝手に喋っている。

『こんぱんぱかぱーん！　巻髪ぱんなだよ！』
「嘘でしょ……？」
外出先で、マネージャーからの連絡を受け、出先用のスマートフォンで動画サイトを見た。
そこにはＬｉｖｅ配信をする……巻髪ぱんなの姿があった。

『今日は配信をお休みするって言ってたけどぉ……みんなに会いたくなってぇ……急遽、特別配信しちゃいまーす』
笑顔で語るぱんな。その声は間違いなく、やよい本人と寸分も変わらない。けれども、彼女は今、外にいる。
演じる事……動画配信を出来る環境では無いのだ。
だが、画面の中のパンナは雑談配信を始めている
「ちがう……！」
その、ぱんなは私じゃない……
コメント欄に訴えを書こうとした。
だが、随時、何十と視聴者から届けられるコメントは雪崩の様な勢いがある。これではやよいの言葉は埋もれて届かないだろう。
仮に言葉が届いたとしても、この出先用のスマートフォンに紐付けられたプライベート用のアカウントでは、自分が巻髪ぱんなである事を証明するのは難しいだろう。
ならば、自分の配信用のアカウントにアクセスし、強制的に配信を終わらせる。
それしかない。
やよいは困惑や恐怖……様々な要因で震える指を賢明に動かし、巻髪ぱんなとしてのアカウントにログインしようとする。
だが、結果は散々たるものだった。
「……そんな」
何度も、何度も……丁寧にパスワードを入力するも、ログインが弾かれる。
十数回試した所で、パスワードそのものが変更されている事にも気づいた。
だったら……と、今度はマネージャーに連絡する事も考えた。
だが、配信上でぱんなが喋っている以上、その配信の主が自分じゃないと、証明するのは難しいように思えた。
結果としては——現段階で、やよいにこの異常な事態を解決する手立ては無い。
その事実に打ちひしがれている、彼女の前で、画面の中の巻髪ぱんなが愛想を振りまき——みんなから愛されている。
「ちがう……ちがう！ それは私、じゃない！わたし、じゃないの！……お願いだから」
絞り出す声は……配信の中の、ぱんなとは似ても似つかない。
「返して、私を返して……」
再び、居場所を奪われる恐怖に、すすり泣く様な声をあげた。

◇2

時節は七月も半ば。
午後に近づき、勢いを増した陽光が、かつてゲームセンターとして機能していた施設に降り注ぎ、その白い壁面を輝かせる。
だが、天窓等の無い室内はそんな光輝とは無縁である。とうの昔に電気を止められた設備に、照明の恩寵は無く、闇夜の如き暗がりが広がっている。
さらに、忍び込んだ夏の熱気と湿り気が、循環しない空気と混ざり合い、かび臭く、ぬるい……淀んだ空気を作り上げる。
そんな暗所に、二度と電源の入る事の無いゲーム筐体の数々が、乱雑に放置されている。
さながら墓石のようであった。
ならば、このグレイブヤードにおいて、今、懐中電灯を片手に、埃を被った筐体に光を当て何かを確認している男――井納武（いのうたける）は墓荒らしか、あるいは墓守りと言った所だろうか。
一歩、一歩……足跡を付ける度に埃が舞う室内で、彼は何かを探す様にきょろきょろと辺りを見回していた。

『イノウくん？　そっちの状況はどうですかな？』

彼の耳に付けたインターカムのイヤホン型受信機から、声が聞こえた。
語調の柔らかさと、声の高さから女性である事がうかがえる。
「……先輩、今ところ……変わった所も、変わった様子もありません」
その声に対して、受信機から口元まで、枝の様に伸びているマイクに、異常無し、と堅い口調で答える。
それから、ふぅ……と溜息を付き、短い黒髪で覆われた頭皮から、額、そして頬へと流れてくる汗を手で拭い、払った。
その塩の滴は、埃が堆積する灰色の地面に、黒い染みとなる。
『……つらそうですな。今、そっちに急行してますから……無理はしないように。今日は特に暑いし……前の車ぁ……』
受信機の先から、車のクラクションが聞こえた。剣呑な状況では無いらしい。
「……先輩、運転には気をつけてください」
『え……あはははは……イノウくんこそ、脱水症状や熱中症には気を付け……そこで右折ぅ？』

「……先輩」
『いや、失敬、失敬』
インカム越しの相手は笑って誤魔化す――運転の態度はともかく、その弾むような声で彼女が感情豊かである人間だということが垣間見えた。
『ともかく、そろそろ休憩を取っては如何ですかな？』
「……まだ、見つかってはいません。だから、調査を続けます。お気遣い感謝します」
タケルは彼女の提案を断る。
その口調は硬い。だが、それは先輩相手に緊張しているから……というわけではない。それは感情が無いような、まるでロボットのような――そんな印象を相手に与える喋り方だった。
『……』
「……どうかしましたか先輩？」
『思うのですが……イノウくんは……ちょっと真面目すぎますぞ？』
「……」
『いや、そんなクソ暑い室内に何時間いるんですかな？　少しは根を上げて……もう嫌ですぅ！　休憩しますー!!　くらい言っても、ばちは当たらないのでは？』
「いえ、自分は大丈夫です」
『そういうとこですぞ』
はぁ、とイヤホンに越しに溜息を付かれた。
『……素直に言えば、心配ですぞ。見た目も、ただでさえ不健康そうな見た目なのに……』
タケルは首を傾げ、自分の身体的特徴について考える。
全身の線が細く色白、両目の下には体質なのか寝不足でも無いのにクマがある。
……うん、たしかに健康そうには見えない、という結論に達する。
「……なるほど、たしかに不健康そうですね。気をつけます」
『じゃあ休憩を取』
「いえ、まだ大丈夫です」
『そういうとこですぞ！　頭岩石人間！　ゴーレム！　あぁ、いや……うん、なら、もう先輩命令ですな。店外に出て、一旦休憩を取る事。夏の暑さを舐めないこと!!』
タケルはしばし沈黙する。それから、数秒の間をおいてから口を開いた。
「……はい、了解です」
『と、それじゃ……あ、前の車ぁ……ウインカーをつけろぉ』
タケルは仕方がない、と店内の捜索を――後、少しだけ……してから――先輩命令なので……休憩のために、店外に出ようと考える。

そして、彼は踵をかえす。

一度、探りを入れた所だが、再び見返せば、何か発見があるかもしれない……と、懐中電灯片手で再び照らした。
その暗がりの中には……様々な種類のゲーム筐体群があった。
景品が入っておらず――水槽の様になったクレーンゲームの筐体。
何台も並列した格闘ゲームの筐体。
カジノを思わせる豪華な装飾が施されたメダルゲームの筐体。
そして、銃を模したコントローラーと、大画面が売りのシューティングゲームの筐体。
耳をすませば……在りし日の、盛況な騒音が聞こえて来そうだった。
けれども、悲しいかな。
このゲームセンターの最寄駅――それと直結した商業施設に、別の遊技施設が導入された事で、客足は遠のき……結果は目の前の光景がすべてである。
終わってしまっている。
なにもかもが停滞していた。
だから、この施設の保有している権利者は……未来の無い、この場の取り壊しを決め、再開発を申請していた。
だから、作業は開始された。

――もう、半年も前に。

「……」
タケルは辺りを見回した。
未だにゲーム機の筐体すら片づけられていない。
そもそも、いくら駅直結にではないにしろ……それなりの地価を有する、この場を放っておくメリットはあるのだろうか？
否、ありはしない。けれども、工事は一向に進んではいなかった。
担当した解体業者が夜逃げした等の事情があった……からだろうか？
否、それは断じてありえない。

――なぜならば、井納武の所属する『組織』に解決の依頼を出したのは、その解体業者だったからだ。
「……」
タケルはゆっくりと……わざと、踵を強く踏みしめ、足音を大きめに鳴らして歩んだ。
誰かに聞かせる様に――誰に？

苛立たせるように慇懃に――誰に？
縄張りに異端者がいると知らせる為に――誰に？
先ほどから、ずっと視線を感じていた――誰の？
だから、待っていたのだ――誰を？

「あそんで」

不意に――耳元にそんな声が届いた。それは甲高い、子供の様な音階。
だが所々、ノイズがかったように、掠れていて……イントネーションもおかしい。
そんな不気味な声は、タケルの背後の暗がりから聞こえてきた。
すぐさま、彼は振り向いた。
――闇の中に、きらめく……何かの反射光。
刹那、ぱぁん!!　という様な火薬の炸裂した音。
次いで、ひゅん!!　という様な風切り音。
すると、彼の足下付近――コンクリートの床に穴が空く。
「……銃」
『今の音は!?　イノウくん!?』
その音に反応して、受信機から彼を心配する声が上がった。
「……先輩、すいませんが、休憩は後で取ります」
『いや、そうではなくて!!』
あまりにも図太い、彼の態度に、彼女は突っ込みをいれる。
タケルはすいません、と小声で返した。
『ともかく、無事ですかな？』
「とりあえずは」
撃たれたが、直接当たったわけではい。
おそらくは威嚇射撃。
不意に動かなければ……相手を刺激しなければ、目先に迫った命の危険は無い。

――今までの経験から、タケルはそう判断した。

「とにかく、相手の出方を見て、交渉してみます」
――交渉、つまりは話し合ってみるという事である。
普通ならば銃をぶっ放してきた相手に試みる事では無いのだが……
『……やるんですな？』
インカム越しの彼女は、タケルの行動を否定しなかった。
「はい。それが俺の仕事ですので……駄目な場合は」
タケルは、自身のワイシャツの胸ポケットをみる。そこには僅かな厚みがあり――何かが入っていた。
『……了解ですぞ。なるべく早く、そちらに向かいますぞ。くれぐれも無理をしないように……場合によっては撤退も視野に』
――もし失敗しても、責任は先輩である自分がとる……と、言葉を添えた。
「……了解です。お気遣い感謝します」
それから、タケルは大きく息を吸って、ゆっくりと吐く。

「対象のデジタルモンスターと接触を開始します」

そう宣言した彼の視線の先――暗がりの中から、まるで蜃気楼の様に、あるいは立ち上る狼煙の様に……ゆらりと姿を見せる異形。
「……あそんで」
タケルが対象をつぶさに観察する。
テンガロンハットと首元を覆う赤いマフラー。
青いジーンズ、と……それだけを見ればカウボーイめいた姿をしている。
だが、胴体が巨大な拳銃で構成されており、異形と称するに相応しい見た目をしていた。
「あそんで」
かん高い子供で呻きながら、こつこつ……ブーツの踵を鳴らし、タケルの方へと向かってくる。
「あそんで」
じりじり……距離を詰めてくる。
近くは無いが、遠くも無い。
「……」
どうしたものか？……とタケルは考えを巡らせる。
今までの言動と行動を顧みて、分析する。
威嚇射撃と、あそんで……という言質。

このデジモンが自分に求めている事は……おそらく何らかの遊技だろう、と考えている。
だが、胴体以外にも両手にリボルバーらしき銃を握っており、物騒な事この上無い。
（……だから、解体業者も逃げ出さざるを得なかった）
日本では、お目にかかる事はまず無いであろう銃器。それを持って迫られれば、尻尾を巻いて逃走するのは自明の理と言えた。
（……とはいえ、自分に逃げるという選択は無い）
そこで、タケルは辺りを見回す。
取り壊しが決まったゲームセンターには……未だに解体されていない、光の灯らない筐体が転がっている。
ふと、その中で目に付くものがあった。
リボルバー型の銃を模したコントローラーが二丁繋がれ、巨大なカウボーイの絵が飾る巨大な液晶画面――――シューティングゲームの大型筐体。

――彼らは現代の妖怪、電子の付喪神だ。
――彼らは形なきもの……非物質から変容し、魂を備えた生物らしき形態を取る。

タケルはかつて語られた、デジモンについての定義を思い起こしていた。
彼らはものすごく雑な区分をすると、妖怪変化の類である。
デジタルモンスター――デジモンはその名に付く通り、デジタル――形なき電子情報から、この三次元へと干渉出来る、肉体を備えた異形へと変容する。
それは未だに人類が獲得していない物理法則による……人知を越えた変化である。
だが、その過程は分からずとも、結果からおおよその事情……あるいは経緯は推測する事が可能である。
そのカウボーイじみた見た目。
そして、近くにあったシューティングゲームの大型筐体。
つまり、このデジモンは――そのゲーム機の電子情報から変化したのだと。
ならば、その言動にも納得が行く。
先ほどから囁く言葉の意味に理解が及ぶ。

「……撃ち合いをしたいのですか」

目の前のデジモンの言葉が止まり、同時に、タケルの言葉に耳を傾けるようにその場に静止した。

――その様子から、正解へと到達したと確信する。

「……そうですか」
このデジモンはシューティングゲーム……その内部にあるデータから変化した。
だから、遊技機としての願望が芽生えているのだ。
誰かに遊んで欲しいという根源的欲求ともいえる。
「でも、俺は銃を持っていませんから」
出来ない……と言おうとした時だった。
銃の異形は両手のうち、左手のリボルバーを――ほうり投げた。
金属と地面が触れあう音。
銃がタケルの足下にあった。
「これを使えということですか……」
彼は床に転がる金属塊を見つめ……数刻の間、思索する。
（……拾うのは駄目だ）
――おそらく、この拳銃を拾った時、始まるのは……命というたった一つの掛け金で始まる、コンテニューの出来ないゲーム。
南無三、タケルはしんでしまった……では洒落にならない。
ならば、何か別の方法を提案せねばいけない。
とはいえ、このデジモンを満足させる方法が、はたして他にあるのだろうか？
言葉が分かる……という点を省みれば、未だ希望はあるのかも知れない。
「……今、このような形でなくとも」
「あそんで」
「他の方法があるのでは……」
「あそんで」
「……」
「あそんで」
「……。悪いけれど、一緒に、遊ぶことは出来」
――出来ません、と言い終える前に、ぱぁん、ぱぁんと耳をつんざく銃声。
それから、きぃん、という甲高い金属音――銃弾が室内で跳ねまわる音だ。
タケルの体が凍り付いたように硬直する。
幸いにも、跳弾による外傷は負わずに済んだ。
幸運だ……とは言えない。
何故ならば……
「あそんで！　あそんで！　あそんで！」

タケルの態度に機嫌を損ねたのだろう。
だだっ子の様に叫び、銃を拾うように迫った。
（次にもし……断ったのならば……）

「あそんで！」

――言葉を理解しているからと言って、こちらの倫理や常識が通じるとは限らない。こちらが、どれだけ友好の意志を示したとて、相手との価値観の差違が、そのまま摩擦熱となり火を付ける。そうして手に入れるのは手痛い火傷だけだ。
今、目の前にいるデジモンとのコミュニケーションはタケルに傷を負わせようとしていた。
だが、それで、逃げ出すという選択は……彼には出来なかった。
（……交渉は詰んでいる）
そう思わざるを得ない――――願わくば、安穏に事を終えたかった。
それは博愛の精神……とは、また違うもの。
彼が、持ちうるデジモンに対する感情、それは――――。

「……本当に残念です」

心の底から、かなしい、と呟いた。

それから、ワイシャツの胸ポケットに手を入れ、何かを取り出した。

◇0―2

その日の『教授』による講義は『匣』についてだった。

それは厚みのあるカード型の機械の名称。

成人男性であるタケルの手に、ぎりぎり収まらない程度の長方形。片面には三つのボタンと、格子窓の様な正四角形の液晶画面が付いている。

『教授』の目の前の机には複数の、色違いの『匣』が並べられている。

「デジモンと接触し、観察する中で、自らの身が危険に晒される機会は……悲しいかな、よくある事なのだ」

『教授』は、額に手を当てて、おおげさに憂いの仕草をしていた。

「その時に必要になるのが、この『匣』なのだ。タケルくん。君は……これに何が入っているか？　知っているね？」

それは予習をしてきたかい？というニュアンスが含まれていた。

教鞭を執る『教授』らしいものの言い方だった。

タケルは知っている。

「デジモンです」

躊躇いも、淀みも無く、当然であると、彼はそう答えた。

『教授』は彼の答えに、うんうん、と頷く。

「……では、戦闘は避けられないとしたら？　逃げることは出来ない、と判断したら？」

再び、タケルに質問が飛んだ。彼は淀みなく、素早く答えた。

「中にいるデジモンを解放し……戦ってもらいます」

「それから？　どうする？」

「……」

タケルはしばし間を置いてから答える。

「――可能であれば、呼び出したデジモンが入っていた『匣』とは……別の『匣』にデジモンを封じます」

――『匣』とは、デジモンを再びデータへと変換し、保存する機械であった。

◇3

タケルが取り出したのは白色の『匣』だ。
それから、機械の三つのボタンのうち、一番右端のボタンを押した。
すると、格子型の液晶画面から、異常な程の光が迸る。
まばゆい輝きは辺り一面に広がり、その場にいる全員の網膜に突き刺さり、視界を閉じる。
やがて、光が収まる頃……その場にもう一つの影が現れる。

――それは天使だった。

短い金髪、幼くも端正に整った顔。小さな体躯体を白い布で覆い、背に八枚、頭部に二対の白い羽を備えた――まさしく天使。

その名はルーチェモン。目の前の異形と同じ、デジタルモンスターである。

「んんー……」
ルーチェモンは閉じた瞼をこすり、その幼い体躯を伸ばす。
その様子は、まるで子供の寝起きである。
そして、その神秘的なベイビーフェイスにおさまる瞼が、ゆっくりと開く。
水晶ような澄んだ瞳が、召喚したタケルの姿をとらえた。
「おぁ……」
すると、小さい輪郭が小刻みに震え……
「タ、ケ、ルッー！」
白の『匣』を再び、ワイシャツの胸ポケットにしまった――タケルに、天使は歓喜の表情で抱きついた。
「ルーチェモン……」
「んもー、待ちくたびれて寝ちゃったぞー！　任務だから喋っちゃいけないし……僕、すっごく退屈だったんだから!!」
タケルは鉄面皮のまま、天使になすがままにされていた。
それは大型犬にじゃれつかれる飼い主めいている。
一方で、銃の異形は――――突然、顕れた同族に困惑の色を隠せずにいた。
先ほどまで、執拗にタケルに遊技をせがむ、童子的行動はなりを潜め――立場は逆転し、

今度は銃の異形が観察する羽目になっていた。
「それで、それで、それで!! 僕を『匣』から出したってことは……君の手におえない相手が出てきたって……わけだろ？」
無邪気に抱きつく天使の顔は――悪魔が契約を結ぶ時のような、蠱惑的な笑みになっていた。
「……面目次第もありません」
「いいよ、いいよ！」
再び変化する。朗らかな……子供特有の柔らかで無邪気な笑顔になる。
「僕は……君の守護天使だからさ」
――かと思えば、まるで聖母を思わせる様な、慈悲深い表情も見せた。
大型犬。悪魔。子供。聖母。
くるくる……と風車が回る様に、あるいは万華鏡が如く、その表情が変化する。
表情の乏しい――――心無きブリキの木こりめいている男とは対照的であった。
「君が願う事は出来うるだけ叶えてあげたい」
再び、人を堕落させるような悪魔の笑みで……ルーチェモンはタケルに誓う。
「……ありがとうございます」
一方で、タケルの態度は――明らかに天使に対して慎みを持って応えている。
それは敬虔な宗徒が清貧を誓うように……どこか、相手に一線を引く様な態度であった。
「ルーチェモン……改めて、お願いします」
――過度に真摯に丁寧に……タケルはルーチェモンに頭を下げて協力を依頼した。
「おっけー！ で、ぶちのめすのは……あいつなわけ？」
ルーチェモンはタケルの前に躍り出て、同族と対峙する。
銃の異形を、つぶさに見る。
「ふーん、リボルモンか……成熟期の突然変異型だ。好きなものはギャンブル」
「……」
「どうしたの？ おびえてるの？」
「……!!」
――ここで銃の異形――リボルモンは困惑するのを止めた。
ルーチェモンが放つ敵意に反応したからだ。
そこには駄々をこね。タケルを脅してゲーム機で遊ばせようとする幼児性は見られない。
それは本来の、デジモンとしての、生存競争に明け暮れる戦闘種族としての本能が、目の

前の天使を敵だと判断したからだ。
そして、彼の左手に残された一丁のリボルバーが火を吹く。
だが、音速を越えた銃弾は……ルーチェモンに到達する前に蒸発した。
「!!」
ルーチェモンの目の前に、熱エネルギーが凝縮された――光る球が浮かんでいる。
それがリボルモンの銃弾を空中で蒸発させたのだ。
「……」
見守るタケルの額に、まるでサウナに入ったかのように、一気に汗がにじんだ。
同時に肌がちりちりと焼ける感覚を覚える。
ルーチェモンの扱う火球の熱量が、あまりにも膨大すぎるが故の現象。
はっきり言ってしまえば……なんの装備も無い、生身の人間であるタケルがその場にいるのは危険すぎる。だが、彼は、決してその場から離れようとはしない。

――ただ、ルーチェモンの方を見つめていた。

「ごめんね、タケル、ちょっと熱いと思うけどさ……すぐ終わらせるから!!」
そして、目の前の天使はそのエネルギー球を敵対者に投げつける。
リボルモンはその光球を跳躍して避ける。
さらに転がり、勢いそのままに起き上がる。
その手にしたリボルバーの照準は天使の羽に向けられている。

――さらには……胴体となっている拳銃から、巨大な弾丸を撃ち出した。

それはデジタルモンスターという種族、それぞれに備わった名称を伴う攻撃方法――所謂、必殺技であり、リボルモンのソレは『ジャスティスブリット』という名称を持つ。
そんな巨大な一撃と無数に放たれた弾丸はルーチェモンの体を貫く……筈だった。
「甘いよ」
だが、天使の背にした八枚の羽が一斉にはばたいた。
強力な推進力を持って、一気に間合いを詰め……ついで弾丸を回避する。
「悪いね」
――必殺技ですら無いルーチェモンの拳が、リボルモンの鋼の銃身を叩いた。
ごん、という鈍い音と共にリボルモンが吹っ飛び、彼がシューティングゲームの筐体へと激突する。
がしゃん、という液晶画面がひび割れる音がした。
同時に埃と塵の煙幕の中にその姿は消えた。

「……しゅうりょー……さぁ！　タケル『匣』の準備を。僕なりに手加減しておいたからさ！」
「……ありがとうございます」
頷き、タケルはズボンのポケットから、先ほどルーチェモンを召喚した、厚みのあるカード型の機械――『匣』の同型機を取り出した。
色は黒。
タケルはそれを手にして。三つのボタンのうち、一番左のボタンを押した。
液晶画面が点滅する。

――『匣』とは、デジモンを再びデータへと変換し、保存する機械であった。

そうして、タケルは『匣』を持って、倒れているだろうリボルモンに近づく。
「あ、そん……で」
傷つき倒れているリボルモンの体はノイズが走り――透けていた。
「……」
デジモンはプログラムから実体化したモノ――その存在は人間の住まう、三次元世界に干渉は出来うる体を持つ。
だが、本来は形なきもの。
非常にあいまいで、変化しやすい。
倒れ伏して、透明になりつつあるリボルモンを見れば一目瞭然だった。

――彼らは非常に曖昧な存在なのである。

だから『匣』で封じ込められる。
また、形の無い何かに戻せるから。

「……」

そうして、タケルが箱をリボルモンに近づけた――

まさに、その時だった。

「あそんで!!」

「!!」

この時を待っていたとばかりに……リボルモンは渾身の力を持って、タケルの手を掴んだ。

同時に……彼の顔に――らしくない困惑と恐怖の相が浮かんだ。

「まずい!!」

ルーチェモンはタケルをリボルモンから引きはがさんと、間に割って入る。

すぐさまタケルの手を握る、リボルモンの手首を手刀で叩く。

強力な一撃に、銃のデジモンはすぐさまタケルの手を放した。

だが……

「危ない!」

ルーチェモンはタケルを突き飛ばす。

間髪入れず、ぴしゅん、という、鋭い……空気を裂く音が聞こえた。

「ぐうっ!?」

――何かがルーチェモンの右肩を貫いた。

「ルーチェモン!」

突き飛ばされたタケルは近くの壁面に背を預け、声をあげる。すぐさま、天使のそばに駆け寄ろうとした。

だが、ルーチェモンは彼に、手を向けて、制止するように促した。

「……そこ、動かないで」

ルーチェモンは、冷静に、自分の右肩に空いた穴を観察する。

傷口の具合から自分の肩を貫いたであろう、弾丸の大きさ――――口径を推測する。先ほどのリボルモンの持つ銃、及びに必殺技『ジャスティスブリット』のサイズと差違がある。

さらに、弾丸の射出速度も異なっている。

これらが意味していることとは……

「……タケルの想いを吸収して『進化』したな……往生際の悪いやつめ」

二人の前に……かつてリボルモンだったもの――形を変えたデジモンが立ちふさがった。

◇0—3

「一般的に進化とは長い時間をかけて、種単位が変貌する事を指している。だが、デジモンの進化とはその概念とは異なり……変身と言った方が妥当な現象。それは、デジモンの姿形に大幅な変化を起こし……大抵の場合は、戦闘能力を向上させる事を意味している」

教授はデジモンの生態について語る。

「彼らには段階があり、その名称は『幼年期』からはじまり、『成長期』『成熟期』、『完全体』……と名称を変えていく』

——では、なぜ進化は起こるのか？

「それはデジモンが同種との生存競争の中で、生き抜く為に……自然と発達した機能なのだ。だが、本来は敵対者を喰らい、全身のデータを増やすなど、長い時間を要するものである」

そう前置きして——だが、例外も存在すると付け加えた。

「例えば——強力なエネルギーを手に入れた場合、急速な進化を促せる事がある」

——そして、人間には……そのデジモンを急速に進化させるだけのエネルギーを秘めた要素を持ちうる。それは……

「人間の想いだ」

——それは、デジモンにとって強力なエネルギーとして作用する。

原理は解明されていない。

ただ、デジモンは——元は形なきものである。

「平将門（たいらのまさかど）、菅原道真（すがはらのみちざね）……かつて悪霊として名を馳せた彼らは、祀（まつ）られる事により、人に加護を与える神へと昇華した。それは人間の持つ感情が、形なきものを変容させた事例の一つだろう」

——人々の想いが形なきものを変えた例である。

「同時に……想い、そのイメージが重要だ。形なきものは不安定であるが為に……その想いを寄り所にして、新しい姿へと変わる」

――人々は願ったのだ。悪霊が神になるように……悪から善へと変容するように……だから、変化した。存在の姿が大きく変わったのだ。

「だからこそ、同じように……デジモンにも人の想いは強く作用するエネルギーとなる。同時に、その時のイメージが強く作用する。恐ろしいと思えば……より恐ろしき姿に変わる」

――例え、愛らしい童子の姿をしていても、一度、恐怖すれば……悪鬼となる。そんな、人の想いは、デジモンにとって劇物ならば……どの様に接すればいいのか？

「一般人にはどうにも出来ない。野生のクマに出会ったように、心を落ち着け、接触を避け……逃げる事をオススメするね。だが、我々は彼らに対処する為に……観察し、分析し、そして、立ち向かわねばいけない。その中で……想いを向けないというのは至難の業だ」

――だから我々には『匣』がある。

「『匣』には、もう一つの機能がある」

――『匣』にはそこに納められたデジタルモンスターだけに、所有者の心、その感情、想いを間接的に伝える機工（からくり）がある。

「更に、これにより……『匣』を持つ者は、敵性デジモンと相対しても……想いをエネルギーとして利用される事はない」

――だが、ゆめ忘れることなかれ。

「直接……直（じか）に接触した場合は話が違ってくる。しかも……『匣』よりも、その影響は色濃く出る」

――忘れるな……デジモンと直に接触してはいけない、と。

◇4

タケルは迂闊だった……と猛省した。
何故、リボルモンが顕現して、半年以上もこの廃墟で実体化を保てていたのか……すっかり失念していた。
特異な生物体とはいえ、生命維持を行うにはエネルギーが必要なのだ。
（……ここに来た様々な人間の感情……特に、恐れを喰って……生き延びていた）
向けられた間接的な感情、あるいは……
さきほど……タケルはリボルモンに手を捕まれた事で……

――古い記憶の底、原初的恐怖。

……恐怖の感情を一気に向けた。
それが呼び水となって、銃の怪異の進化を促してしまったのだ。

「僕が悪いんだよ……」
「……ルーチェモン」
「あいつが動けないかどうか……僕が確認すれば良かったんだ」
タケルの額から、汗が一筋、頬を伝って地面に落ちる。
「あぁー……舐めてかかるのは、僕の悪い癖だ。タケルの前でかっこわるいよー……うぅ、ひと思いに再起不能レベルにすれば良かった」
天使はやれやれ、と両手を振る。

目の前にはリボルモンだったデジモンがいた。

それは起き上がりこぼしに酷似した形状。
その丸みを帯びた体全体を暗緑色の草で覆った異形である。
一見すると、リボルモンよりも愛らしく見える姿形をしているが……羽を撃ち抜いた猟銃――スコープ付きのライフルを両手で構える様の不気味さの方が勝っていた。

「ギリードゥモン、完全体……！　ちょっと、まずいかなー？」

その面倒な相手が、さらなる追い撃ちをかけようとする。ライフルの照準を今度は、天使の心臓に……その胸に向ける。
けれども、そうはさせまいと、ルーチェモンは、光るエネルギーの塊を投げつける。
「っ……！」
咄嗟（とっさ）のカウンターである為、撃ち抜かれた右側の腕で投げつけてしまう。当然ながら、送球の速度は遅い。
それでも、リボルモンならば対応出来ない速度。
しかし、今はギリードゥモンである。
ぱぁん、と銃声が一つ。
エネルギー球は……物理法則を無視して――――一発の銃弾にかき消された。
そして、ルーチェモンとギリードゥモンは再び、向かい合う。
沈黙が訪れ、しばし戦闘による騒音は止んだ。
（……まるで、西部の決闘劇だ）
その静寂の中で、後方にて、ルーチェモンを見守るタケルはそんな感想を抱く。
事実、今、二匹は一触即発の緊張状態にある。
お互いがお互いに……相手の出方を探り、そして、必殺の一撃を叩きこんでやろうと、画策している状況である。
「あぁ……もう、苛々する」
そんな沈黙を最初に破ったのは……ルーチェモンのほうである。不機嫌そうに……かといってギリードゥモンから視線をはずさずに声をあげた。

「……タケル、願って」

そう、ルーチェモンは催促する。
「……それほどの相手ですか？」
「そうは思わない。でも……念には念を……用心するには越した事は無い。さっきみたいな失敗はしたくないだろ？　だから」

――君の感情を僕に賭（あず）けてくれ。

そこには無邪気な子供でも、妖艶な悪魔の笑みも、慈母の優しさも無い。
真摯真剣に、自分の相棒に頼み込む、勇ましい天使の顔があった。
その言葉に――タケルは静かに頷いて応える。

タケルはその右手に白の『匣』を握った。

それから、手を額へと近づけ……瞼を閉じる――それは一種の儀礼だ。

タケルがルーチェモンに加勢するための方法、それを行う為の事前準備。

あるいは精神的なルーティーン。

今より行われるは――人がデジモンに勝る、唯一のものの発露である。

瞳を暗闇の中に置く、タケルは……願う。ルーチェモンの勝利――ただそれ一点だけを心に浮かべる。

ほどなくして……白の『匣』がタケルの手のひらの中で震えた。同時に手のひらの中に熱を感じる。

――『匣』には、そこに納められたデジタルモンスターだけに、所有者の心、その感情を間接的に伝える機能がある。

強大なエネルギーが『匣』を通してルーチェモンに送信される。

タケルの持つ想いが届けられると、その体に変化が起き始める。

幼いシルエットが白い燐光に包まれ、光は徐々に輝きを増し、それに伴い……肩の傷が塞がっていく。

「……!」

ギリードゥモンはみた。

自分が与えた会心の一撃、その証拠がみるみるうちに消え去っていくのを。

「……よし、準備万端」

やがて、傷は癒えて……ルーチェモンの口元に獰猛な笑みが浮かんだ。

そうして、準備万端となった天使に――内心、動揺はしつつも、ギリードゥモンは、冷静に両手に握られた猟銃の照準を、再度、天使の心臓に定めた。

一方で、ルーチェモンもまた、迎え撃つ為に――先のエネルギー球体を、今度は、両手に生成した。

決着は一瞬。その緊迫のボルテージが最高潮に達した時……

「勝負だ」

挑発しながら、ルーチェモンは……飛ぶのではなく、歩んだ。

ギリードゥモンは驚いた。

次に相手は、先ほどと同じように飛行により距離を詰めるのだと思っていたから、一瞬の躊躇いが……コンマ一秒にも満たない時間、トリガーを引く指を鈍らせた。

ぱぁん、と火薬のはじける音がした。
だが、弾丸はルーチェモンの後ろ、なにもない空間へと消えていく。
「……！」
その一瞬にして、背の八枚の羽を駆使して、ルーチェモンは飛翔していた。
歩く事により、油断を誘い……緩急をつけての跳躍が一手を不発にした。
だが、それで終わるギリードゥモンではない。
すぐさま、もう一発、撃つ。
白い羽が一枚、撃ち抜かれる。
「……まだまだ」
空中で一瞬、バランスを崩すも、すぐさま立て直し、ルーチェモンはギリードゥモンめがけて突撃する。
再び発砲。羽が撃ち抜かれる。
残りは六枚になった。それから続けざまに……五枚、四枚。三枚、二枚、一枚……。
「つ……！」
飛行する事も最早、困難になった。だが、その距離は縮まっていた。
そうして、最後の羽が撃ち抜かれた時、ルーチェモンは　ギリードゥモンの懐に飛び込んでいた。
「……一手、惜しかったな」
零距離、この距離で猟銃は使えない。羽は傷ついているが、ルーチェモン本体にはなんら傷は無く……その両手の光球がギリードゥモンの体に押し当てられようとしていた。
ルーチェモンは、全身を覆う草の隙間に見える、ギリードゥモンのオレンジ色の瞳に……自分の水晶の様な瞳を合わせた。
「……ゲームオーバー。僕の勝ち」
そう言ってギリードゥモンに光球を押し当てた。
草で覆われた全身に、火が燃え広がる。だが、ギリードゥモンは……なんの驚きも見せない。ほどなくして、あっけなく力つき倒れた。
「……終わったのか？」
見守っていたタケルがルーチェモンのそばに駆け寄った。
「終わったよ……ほらほら、ほらぁー、さっさと『匣』にしまった、しまった！」
促されて、タケルは黒の『匣』をギリードゥモンに向けた。その体が光る粒子となり、カード型の機械へと吸い込まれて行く。
やがて、その体は輪郭を失い……地面に倒れていた跡だけが残る。
「さてと……じゃあタケル」
その様子を見届けると……ルーチェモンは傷んだ羽をさすりながら、タケルの方を向いた。

「良く出来た、自分のパートナーに……してあげられる事はなんでしょうかー？」
「……」
「くふふふふふ」

――おずおずと、躊躇いがちにタケルはルーチェモンの頭を優しくなでた。
ルーチェモンは……まるで騎士が王から爵位を与えられるように恭しく、その手を慈しむ。
やがて、穏やかな時間は終わる。
「ふふ……もうすこし、このままでいたいけど……ちょっと、疲れた。一旦、眠るね」
と、眠気まなこをこする。
そして、タケルの持っている白の『匣』に戻ろうとする。
「ルーチェモン」
「ん？」
「……今回もありがとうございます」
そんな天使にタケルは心からの礼を告げる。
「そんなの『匣』を通して伝わるのに……」

――でも……
「嬉しいな。直接言われるのって……くふふ、どういたしまして……それじゃあね」
ルーチェモンはその様子を黙って見つめながら、はにかんで――――光の粒子となってタケルの持つ、白い『匣』の中へ、ギリードゥモンの様に吸い込まれて消えた。

それから、後日――廃墟となったゲームセンターは解体され、何も無い更地となった。

◇5

ゲームセンターの駐車場に、タケルは一人で佇んでいる。
すると、一台の車がやって来てくる。
それは派手な黄色いワゴン車だった。
タケルはその運転席側の窓に近付く。
するとその窓が下に降りた。

そして運転席に一人の女性。
黄色のメッシュが入った肩口までの金髪。
丈の長い白衣を纏った彼女――タケルと連絡をとっていたインカム越しの相手――九十九真紀（つくもまき）は、
「大丈夫ですかな？イノウくん！」
と、タケルの心配をした。

「大丈夫です。先輩」
何事も無かったかのように、涼しい顔で告げた。
それから、彼は夏の外気から逃げるように、後部座席側のドアを開き、そそくさと中に入った。
「……先輩、対象のデジモンが入った『匣』です」
タケルはマキに黒色の『匣』を手渡した。
それを受け取ると、マキは表面についた三つのボタンを手早く、数回押して、操作する。
液晶画面が点灯し、何かの文字列を表記されていた。
それは未知の文字である。ＡＢＣ、ハングル、漢字、アラビア文字――どの人類の文化圏にも存在しない、奇妙な文字列。
マキはその羅列をまじまじと見つめている。
「ギリードゥモン、完全体……うん？」
彼女、後部座席でくつろぐタケルに怪訝な視線を向ける。
「……本当に大丈夫でしたかな？」
「……大丈夫です」
ねめつく彼女の視線。
だが、平坦（ポーカーフェイス）な表情でタケルは答える。

「……うーん、連相報……」
マキはその仏頂面を見て……これ以上の言及は無駄だと判断した。
「どうかしましたか？　先輩」
「いや、気にしないでおきますぞ……とりあえず、これで仕事は終わり、自宅まで送りますぞ」
「ありがとうございます」
黄色いワゴン車は暗がりの中にある駐車場を抜けて、真夏の白い光の下へと駆けだした。

「次の依頼主の名前は串木野やよい。職業はＶＴｕｂｅｒ」
「……Ｖｔｕｂｅｒですか？」
タケルを自宅へ送り届ける最中、マキは運転中の眠気覚ましも兼ねて――数日後、次の依頼についてのミーティングを車内で始めた。
「そう、ＶＴｕｂｅｒ。活動名は『巻髪ぱんな』……大手事務所『デジライフ』の所属。登録者は百万人を越える……って位の超ド級の有名配信者ですな」
「……巻髪ぱんな。九十九先輩と名前が被ってますね」
まき、の音が一緒です、と真剣な表情で口にした。
「うーん、イノウくん。面白いジョークですな」
運転しながら、マキは、ははは……と乾いた笑いを口にした。
「でも、この場合、巻髪パンナの巻は……多分、牧場（まきば）とかの――まき、に同じ読みの漢字を当てはめたもの」
「……？」
「髪もそう、神様とかの、かみ……巻髪パンナの見た目はご存じですかな？」
「いいえ……」
「では、依頼人の事を知る為にも、今すぐ検索なう」
マキは赤信号で停車している最中、手早く、助手席に置かれたタブレットを後部座席にいるタケルに放り投げる。
それをキャッチした彼はネットに接続し、巻髪ぱんなの画像を検索した。
並ぶのは、頭部には雌山羊の角を備え、ピンク色の長い髪の毛に、ゆったりとした布服を着た、アニメ調の女の子のイラスト。
「山羊の角に、古代ギリシアの布服キトンらしき服装、となれば……牧神（ぼくしん）パンがモチーフ！」
牧神パン。聞き慣れない言葉にタケルは首をかしげた。
「パン……？」
「食べるほうではありませんな。パニックの語原になった神様……で、同時に山羊座の逸話にも出てくる。だから、ぼくしん――ぱんからの、まきがみぱんな……で、山羊」

名は体を表す――まるでデジモンみたいだ、とタケルは思う。彼が出会ったデジモンのほとんどは、身体特徴と名前が一致していた。
リボルモンは体がリボルバー型の銃器であるから。
ギリードゥモンは迷彩服（ギリースーツ）の様な見た目をしているから。
（ルーチェモンは……）
その言葉の由来が何であるかタケルは知らない。
調べれば分かるのかもしれないが……

「……先輩、勉強になりました」
「ふふふ、おだててもなにもでませんぞ？」
「いえ……ただ、毎度、そういう先輩の知識はためになります」
――マキはこのような神話等の逸話に詳しい。それ以外にも、オカルトや、民俗学等の分野に精通しており……デジモンに関わったのも、そんな学問に身をやつした結果だと、タケルは風の噂で聞いている。
そんなマキは、バックミラーでタケルの様子を見た。
至極真剣な表情で彼女に羨望の眼差しを注いでいる。
「オカ研時代に……イノウくんみたいな後輩がいれば……退屈はしなくて済んだかもしれませんな」
タケルに聞こえるか聞こえないか……その程度の小さな声で、呟いた。
「え、なんですか？」
「ンンン、何でもありませんぞ……あぁ、話がそれましたな」
――それで依頼の内容なんですが、と真剣なトーンで切り出した。
「なんでも……その、巻髪ぱんなちゃん、無断配信やらかしたらしいですぞ？」
「無断配信？」
聞きなれない言葉にタケルは首をかしげる。
「……事務所に所属していると、色々しがらみがあって、配信内容を事前に申請している所も多くある……彼女は本来なら配信が無い日……正確には……してはいけない日に配信を行ってしまった」
「それは……」
――それは自分たちに関係ないのでは？　本人の問題では……？　と、タケルは首を傾げた。
「そう！　そういう顔になる……でも、問題はここから。巻髪ぱんなの中身……と、あまり、こういう言い方はしたくはありませんが……ともかく、中の人である串木野さんはその日、外出してたんですな」

――外出していた。その言葉が指し示すのは、串木野やよいは絶対に配信は出来ないという事実。
「誰かが勝手に巻髪ぱんなを演じていた……けれど」
「はい。音声解析ソフトで、該当の日の配信を確認しましたが、ほぼ百パーセント……串木野やよい本人の音声と合致、つまりは」
――串木野やよいではない誰かが、串木野やよいそのままとして配信を行っていた。

「……怪談ですね」
「ホラーですぞ」
二人の意見が一致する。社内にしばしの沈黙が訪れる。
「普通ならそれで終わる。でも、私らにはそういう問題を起こす存在を知っている。そして、この依頼が回ってくる時点で、ほぼ百二十パーセント、デジモン絡みだっていう事は間違いないですぞ」
故にタケルたちが出向く事になっているのだ。
「そろそろ着きますぞ」
その言葉を受け、タケルはタブレットを後部座席の上に置いた。
車窓から見える景色はタケルが住まう町並みの風景を写す。やがて、一つのマンションの前にワゴン車は停車した。
「ありがとうございます。先輩」
「いやいや……と、イノウくん」
「はい……？」
「おつかれさま」
「……ありがとうございます」
下車しながらタケルは頭を下げる。マキはその様子を見届け、すぐさま、車に乗ってその場から去った。

作業用の机と本棚、着替え用の衣装箪笥、そしてベッド。
たった、それだけの描写で事足りる――それがタケルの自室。
シャワーを浴びて、早めの夕食を取ると……すぐさま、その長身痩躯をベッドの上に投げ出した。
そこで、自分が思ったよりも、今日の依頼で消耗しているのだと気づく。
このまま眠ってしまおうか……と目を瞑る、だが、眠気はやって来ない。しょうがない、と体をゆっくりと起こす。さて、なにをして眠気を待とうかと思ったところで……

「……ルーチェモン」
手にしている白の『匣』に語り掛ける。
すると……
「んん……なに？　タケル」
眠たげな天使の声が『匣』に付いた小型スピーカーから流れる。
「……すいません。お疲れのようでしたね」
「……ごめんねー……さっきの戦闘、ちょっとはりきりすぎちゃったからさー……でも」
「いえ……ゆっくり休んでてください。元気なルーチェモンと喋る方が……俺は好きなので」
――そっか、と一言、添えて……ルーチェモンの声は消える。
改めて……暇になったタケルは……次の依頼者――串木野やよい。
正確には……巻髪ぱんなについて調べようと思った。
タケルは作業机へと移動し、机上のノート型のＰＣを立ち上げる。
そうして、ネットに散見する情報……非公式のファンサイトから、所属している事務所のページなどを確認し、彼女の人となりを調べていく。
最終的に、タケルは、本人の配信動画を見ていた。

――巻髪ぱんな。雑談配信から始まり、ゲームの実況、歌唱配信、企業から依頼を受けた新製品のレビュー……さらには、３Ｄアバターを用いた、ネット上でのコンサート。
（……生身のアイドル顔負けの多忙なスケジュールですね）
――だが、そこまで至るには……大分、苦労していたらしい。
初期配信には『黒魔術やってみた』という様な胡乱な配信から……ＡＩに自分の声を学習させて、もう一人の自分と対話するという実験配信等……やけに前のめりで、体当たり気味な企画が……多く散見していた。
（……昆虫食……はたして美味しいのでしょうか？）
けれども、その姿勢には……明らかな努力の色が見え隠れしており、今日の彼女を形成するものとなっているのだろう。

なるほど、１００万人が応援したくなるのも無理からぬ話だ、とタケルは一人納得していた。

（……依頼の日まで、もう少し彼女の事について、勉強しないと）
そう思った頃には眠気がやって来た。
もう少し調べるのは、明日になってからでも良い。そう思いながら、タケルはノートＰＣを閉じて、心地よい眠気にその身をゆだねるのだった。

◇6

ギリードゥモンの一件から数日後――

分厚い雲が天を覆い、今にも雨が降りそうな気配があった。

だが気温が下がる兆候は見えない。

故に、湿度も気温も高いという、不快な日。

タケルとマキはとあるマンションの一階――――広々としたエントランスホールで、上階へと向かうエレベーターを待っていた。

「……先輩、ＶＴｕｂｅｒって儲かるんでしょうか？」

その最中にタケルの口からそんな感想が漏れ出た。

二人が佇むエントランスだけでも、高い天井と、来客用のソファとテーブルが設けられ、格式高い雰囲気を持っている。

さらにはオートロックのドア、監視カメラ等の各種、警備設備も見受けられる。

それだけの要素があれば……このマンションに、それ相応の賃貸料が必要であろう事が、誰にでも推理出来るだろう。

「正直な話をすれば、ピンからキリですぞ。今回の依頼人は事務所にも所属している、超売れっ子。設備や安全面を考慮すれば……賃貸料は逆に安いくらいではないかと？」

「……なるほど」

苦笑しながら答えるマキに、タケルはなるほど、と納得した。

「でも、こんな所に住めるのは、本人の、それ相応の努力の証ではないかと」

タケルは無言で頷いた。

彼は、あれから……今日、ここに来るまで、さらに巻髪ぱんなについて、主に過去の配信を見る事で、その人物像を徹底的に調べ上げていた。

結論として、やはり最初の印象と変わらず、何事についても真摯で、それでいて何処か不器用。だが克服する為には努力をいとわない、そんな誠実さを持つ女性……というのがタケルの持つ印象であった。

なので、先にマキが上げた感想にも頷けるというものだった。

でなければ……あれだけの人に愛されるようになるのは、なかなか難しいのではないかと考えていた。

「そろそろ依頼人とご対面ですぞ。イノウくん」

――そうこうしている内に二人は、依頼人の部屋の前へと到着する。
「と、その前に最終注意……基本は私が彼女とコミュニケーションは取りますぞ。レディの家ゆえ、下手に動かないように。ただでさえ、イノウくんの顔は恐い……いやいや、不健康そうなので、相手を怯えさせてしまいますからな」
「……了解です、注意します」
特に、何の感慨も無く、タケルは頷く。
「……それじゃあ、いきますぞ」
告げてから、マキは玄関の呼び鈴のボタンに指をかけた。

タケルにとって巻髪ぱんな――串木野やよい、その見た目の第一印象は……思ったよりも普通の女性であるという事だった。
マキよりも身長が低く、童顔で、ウェーブがかった長い黒髪の彼女は……どこか怯えた雰囲気で二人を出迎えた。
「こんにちは、串木野さん。ご依頼を受けた■■社のものです」
マキがいつもの砕けた口調をおさえて、やよいに用件を伝える。
――■■社というのは偽名である。タケル達の所属する『組織』にはちゃんとした正式名称があるが……あまりにも胡散臭いので、こう言った依頼の際、便宜上、使っている名前である。
「……どうも」
……手短な挨拶をすると、すぐさま――彼女はタケルたちをその場所へと導く。
「……こちらが、配信を行う防音室です」
たれ目で、眠たげな眼差しが二人に告げる。
「ありがとうございます。それと、事前に申し上げたと思うのですが……こちらの防音室内には貴重品や、何か見られたくないもの……私生活に関わるもの等は無いでしょうか？」
マキは、ゆっくりと、丁寧にやよいに問いかける。
「……だいじょうぶです」
控えめな返答だった。
そんな風に彼女がマキと言葉を交わす中、ちらちらと――ほんの僅かな時間だが、やよいはタケルの方に視線を向けてきた。
だが、彼が目をあわせようとすると、途端に、その目を逸らす。
タケル本人は、何故だろうか？　という疑問を抱いていたが、それを聞き返すわけにもいかず、ただ普段と変わらず鉄面皮を貫くのみである。
「一応ですが……もう一度、事前確認です。私も一緒ですが作業員である、この男性があな

たのプライベートルーム……その一つに入る事を許可願えますでしょうか？」
やよいは頷いた。それから施錠を解き、ドアを開く。
そこは簡素な作りの、窓の無い小さな部屋。
中央には肘掛けのついた立派な椅子と、大きな作業机が鎮座している。
そして、机の上には、三つのモニターに接続した高い処理能力を持つゲーミングパソコンと、大型のマイク等が置かれている。
（……ＶＴｕｂｅｒの配信設備か）
タケルは毒にも薬にもならない感想を頭に思い浮かべる。
しかし、その胸中には感動があった。
ここからたくさんの人々を魅了する。あの配信が行われていると実感すると、何か、熱い感情がこみ上げてきた。
「……あの、なにか？」
そんな感情が故に、設備を凝視していたタケルに不信感を覚えたのだろう。
やよいは――不審者を見る目つきで話しかける。
「不快にしてしまったなら、すいません。ただ、今回……依頼の内容について思い出していまして」
当たり障り無く、タケルは落ち着いて、嘘の回答をした。
決して、巻髪ぱんなとしての貴女の活動に感銘を受けたから、感動していたのです、などとは言わない。
こういう業務は守秘義務を持って行われるもので、依頼主の職業について、べらべらと話し込むものではない……という、マキからのアドバイスである。
「……診断して欲しいＰＣはあちらでしょうか？」
冷静に机上のゲーミングパソコンを指さす。
「……はい、そうです」

――表向きの依頼内容は、悪質な新型ウイルスによる、パソコン内のシステムエラーを解消する為のサポートである。

やよいは、あの日について思い出す。
自分以外の誰かが巻髪ぱんなとして、勝手に配信を行った日。
出先から、自宅へ帰ってきた彼女は……一度、冷静になり原因を推測した。
そして、ウイルスによる遠隔操作を疑った。誰かが、勝手に巻髪ぱんなになりきり、配信を行った……それ以外考えられなかった。
声に関しては――おそらくは自分の声を無断学習させたボイスチェンジャーを使ったのだろうと勘ぐる。

そうして、ルーターの電源を落とし、ネットから遮断したスタンドアローン状態のＰＣで、既存のアンチウイルスソフトでのスキャンを行った。
だが、それらしい原因は見つからない。
何度、試してみても結果は同じ。
――――やよいは怖くなった。

また、同じ事が起きて……自分ではない誰かが……勝手に、巻髪ぱんなとして何かをやらかすのではないかと。
故に、所属している事務所には体調不調を申し出て、無期限の配信休止を宣言する。
そして、あらゆる人づてを頼って、今回の事件を解決出来る人材、もしくは会社を探した結果、奇跡的に見つかったのが、タケルの所属する『組織』である。
……と、本人は思っているだろう。

実際は『組織』が敷いている情報ネットワークに彼女の惨状が伝わったからだった。
数日前のギリードゥモンの件と同じく、一般市民には預かり知らぬ所で……タケル達の組織は暗躍し、デジモンの起こす事件の情報を収集している。
そして、コンタクトを取り、解決する。
それが彼らの仕事だった。
「大丈夫です。必ず、解決してみせます」
タケルはやよいに精一杯の笑顔を作ってみせる。対象を安心させるのも仕事のうちであると、マキから教わっていた。その普段の彼ならばしないであろうスマイルも、その処世術の一つである。
「はい……」
少しだけ、戸惑いの表情を見せてから、やよいはタケルに返答する。その視線から、懐疑の眼差しは消えてはいなかった。

「では、まず……パソコンの電源ケーブルを入れ直して、ＰＣを立ち上げても？」
マキが最初にやよいに問う。
先の事件で、待機状態（スリープモード）にしていたパソコンが勝手に動いたのだ。
ただ電源を落とすだけでは駄目だと……やよいは電源ケーブル自体を抜き、電力を完全に遮断する方法を取っていた。
それはやりすぎかと思われるかもしれない。
しかし、現実の問題として、ネットに繋がないスタンドアローン状態にしても、既にウイ

ルスに感染したＰＣでは、内部で情報の改竄が行われ、攻撃の証拠等が失われるケースが存在している。
故に、電源ケーブルを抜いた状態にするのは非常に正しい判断だと、マキはやよいのことを心の中拍手喝采と賞賛する。
――それは……デジモンを逃がさない為にも有効な手段でもあった。
この中にどんなデジモンが入っているかは分からない。だが、実体化する前であるならば……どの様な凶悪なデジモンでも、動きを封じられる。
彼女の恐怖心が幸運を呼んだ。
依頼を受けた際、現在の彼女の状況を確認した時、ＰＣの電源ケーブルを抜いていない……と答えていたならば……ギリードゥモンの件よりも、先にこちらを優先していただろう。

「……おねがいします」
「では……」
マキはタケルにアイコンタクトを取った。
彼は、机の下の電源ケーブルのプラグをコンセントにはめ直す。
それから……ほどなくして、ＰＣの電源ボタンを押す。
動き出す冷却ファンと、立ち上がりを示すシステム音。
三つのモニター、それぞれに当たり障りの無い、猫の壁紙と整然と並べられたプログラムファイル群が映し出された。
ここまでの行程で、特に異常は見受けられない。
「ここまでは、よし……と」
それから、マキは――――白衣のポケットから黄色い『匣』を取り出す。
「……それは？」
「……特性のアンチウイルスソフトの入ったデータメディアです。中身は企業秘密で、お話する事は出来ませんが」
真っ赤な嘘である。
この黄色い『匣』には――マキが協力を取り付けたデジモンが入っている。
それを直接やよいのＰＣ内に解き放つ事で――この内に巣くっているデジモンと戦わせ、ギリードゥモンの様に、弱らせ捕獲。もしくは誘き出そうという算段である。

『……いいですかな、イノウくん。今回の件、依頼人のＰＣにどんなデジモンが巣くっているかは不明。けれども、実体化するのを避けているという事は……出てきたくない何らかの理由があると考えるべきですぞ』
――事前の作戦会議で、マキがタケルに告げる。

『実体化したくない理由。……デジモンは野生生物と同じで、己の生存の場を荒らされたくないが故に実体化を避ける場合がある』
『うむ。前に話した内容を覚えていてくれて、先輩冥利に尽きるというものですな』
――たとえば、それは、スズメバチの巣。
生物として適切な居場所を作る事はデジモンも同じである。
だが、山奥に隠れて潜んでいるならばそれは許容されるだろうが……スズメバチの巣が人間の生活エリアに入ってしまえば話は変わってくる。
人間に実害が出てしまう距離になれば、駆除するしかない。

「……それでは、始めます」
黄色の『匣』とやよいのパソコンをＵＳＢケーブルで繋ぐ。
それから、マキは『匣』の三つのボタンのうち、真ん中を押す――液晶画面に光が灯る。
パソコンのモニターに変化は無いが、唸る冷却ファンの音から、何かのプログラムが作動中である事を告げていた。
タケルは緊張で息を飲む。
万が一、マキのデジモンに追い立てられて、相手が実体化した場合……そのデジモンをこの部屋で追いつめるのはタケルの役割だ。
どんな事が起きるかは分からない。
交渉で済むかもしれないし……ギリードゥモンの時の様に実力行使に及ぶ可能性も捨てきれない。
なので、事前にルーチェモンに話は通してある。
『いいよ！』
すぐさま了承した。ありがたいな、本当に彼には感謝してもしきれない、とタケルは思う。
故に、ポケットにはいつでも彼を実体化出来るように……半起動状態の『匣』を忍ばせてある。
――さぁ、来るならば来い、とタケルとマキは身構えて事に当たる。

そうして――――どれくらいの時間が経っただろうか？

「あれ……？」
「え、あの。どうか、しましたか……？」
困惑した様子のマキにやよいが声をかける。
「……あ、いえ……何でも」
依頼人を不安にさせない為に笑顔で返す。

だが、その表情には――焦燥の色がにじんでいる。

「ちょっと、イノウくん？」
「……先輩？」
ちょいちょい、と……タケルを手招きする。
この役割を放棄していいのか？　とタケルは面を喰らうも、先輩命令は絶対なので、部屋の隅に移動したマキのそばに近寄った。
「少し、相方と相談しますので、しばしお待ちを……」
「え、あ……はい」
やよいから少し離れて、マキはタケルに――
「……ＰＣの中にデジモンがいないですぞ」

そう、耳打ちした。

◇7

タケルはやよいと二人で防音室でマキの帰りを待っていた。

『……すいません、やよいさん。車に別の道具を取りに行きますんで、私が帰ってくるまで、少しの間……お待ちをください』

黄色の『匣』とPCの直結を解除し、ケーブルをその場に捨て置くと、彼女はマンションの来客用の駐車場へと走っていく。

結果として、タケルはやよいと二人きりになっていた。

「……」

「……」

お互いに気まずい沈黙である。

「あの……」

「……はい？」

沈黙に耐えきれず、先に声を発したのはやよいの方だった。

「……イノウさんでしたっけ？……このお仕事は始められて、長いんですか？」

「……いえ、まだ始めて半年くらいになります」

――それはタケルがデジモンと関わりを持ち始めたのと同じ時間である。

この仕事を始めてから、まだ、そう長い月日が経っているわけではない。

不慣れな事も多い、と本人は自覚している。

例えば、対人関係が絡むとなると……彼の堅物さも相まってコミュニケーションが上手くいかない事があった。

故に、タケルとしては人が絡まない依頼の方が得意であった。

先のギリードゥモンの件と同じように、廃墟を探索する方が性に合っているとも感じている。

もっとも、今回の様に複数人であたる依頼が苦手であるわけではない。

逆に、自分に与えられた役割をこなす事に徹底していれば良いからだった。

また、沈黙が訪れた。

「……不安ですか？」
「え？」
次に、先に口を開いたのはタケルの方だった。
自分の経歴の浅さに顧客が不安を覚えるのは無理もない……という意味での問いかけだった。
「……正直に言えば、そう思ってます」
「……なるほど」
「依頼を受けてくれたという事は……私の素性もある程度、ご存じかと思いますが……私、また同じ様に仕事が出来るんでしょうか？　それがたまらなく不安なんです」
そっちか、と。タケルは……やはりコミュニケーションは難しいな、と実感した。
「私は自分の仕事が生き甲斐なんです。それしか私には取り柄がないから……」
先ほどまで、あまり感情を見せなかったやよいは、苦しそうに吐露する。
「……今回の件、はっきり言ってしまえば……特例です。前例をみない問題であるというのは間違いないでしょう。不安に思うのも当然でしょう」
「でも、異常すぎますよ。同期にそれとなく聞いたって……そんな事は、噂のひとかけらも、根も葉も無い話だって……向き合ってくれませんでした」
「……」

「誰も、信じてくれませんでした」

――一般人がデジモンに遭遇する確率は……今のところ、未だ低い。
それによる事件は未知数である。今回の様に、ＶＴｕｂｅｒの声まで含んだ乗っ取りなど、その最たる例だろう。
外部の人間の理解の及ぶ所ではない――初めて半年ではあるが、そういう依頼者をタケルは、何回か見ていた。
「……いえ、同期の子たちはみんな、良い子なんです。いつも、こんな取り柄の無い、私でも……優しくしてくれる……でも、でも」
やよいは言葉に詰まった。それから沈黙する。ただ、何かを喋ろうとはしていた。
そうして、少しの間、呼吸を忘れた人の様にもがく。
「すいません、初対面の人にこんな事……」
やがて、少し落ち着いたのか、声をあらげた自分を謝罪する。
その様子を見てタケルは――

「……孤独ですね」

少し、トーンの低い声で応えた。
「え……」
それは予期していない言葉である事は、やよいの反応を見ても事実だろう。だが、そんな彼女にかまわずにタケルは口を動かす。
「……まるで、世界に自分一人しかいない。誰とも繋がりを持てず、価値観を共有出来ない。そういう時、人は孤独となり、不安となる。自分だけが間違っていて……後は正しくて」
――何もかもが――まるで自分の全てに価値が無いように思えて……
「……そういうのは嫌ですよね――えぇ、俺も孤独は嫌いです。串木野さんも、孤独は嫌ですよね？」
「……え、えぇ」
タケルの突拍子も無い言動。
だが、やよいは素直に頷いた。
それから、彼は……
「先ほども申し上げましたが……必ず、今回の依頼を解決してみせます。貴女は孤独じゃなくなります」
約束します。
そう力強く、確かな意志を持って言い切った。
「あ……はい」
やよいはそんな彼に……
と、ここで――――
「……あれ？」
何かのメロディー、おそらくは着信音であろう――それが室内に響きわたった。
「……す、すみません」
やよいは慌てて、履いていたジーンズの尻側のポケットをまさぐる。そして、取り出したのは……プライベート用のスマートフォンだった。
――ＰＣ内にデジモンはいなかった。
「あ……」
それを見た瞬間、タケルの脳内にマキの台詞が思い起こされる。
直後、今、自分たちが置かれている――――危うい事態に気付く。

「串木野さん！」
「え……？」

ルーターの電源を落とし、Ｗｉ―Ｆｉ（ワイファイ）等、ネットに接続しないように設定していても通信出来る手段は存在する。
たとえば、Ｂｌｕｅｔｏｏｔｈ（ブルートゥース）……十メートル程度の範囲内であれば……ＰＣとスマートフォンの間で、ファイルのやりとりは可能である。
事実、やよいはプライベート用のスマートフォンとパソコンの間で、Ｂｌｕｅｔｏｏｔｈを用いたデータのやりとりを行っていた。
頻繁にではないが……接続の設定は維持されたままである。
そして、デジモンは一般的な常識の埒外の存在だ。
マキがこの部屋のパソコンを起動して『匣』で探りを入れる、その直前にスマートフォン側に逃げたとしても何らおかしくは無い。

そして……獲物が網にかかる瞬間を虎視眈々と待っていたとしたら？

次の瞬間――スマートフォンから……闇が漏れ出した。
漆黒の絵の具が一気にぶちまけられたと表現しても良いだろう。それらが部屋の中を一気に染め上げる。
「え……」
「つ……！」
それは怒濤の勢いで、タケルは――――。

◇8

最初に感じたのは――――浮遊感。
絶叫マシーンに乗って、落下する時の感覚……内臓が浮ついている。
それから――――タケルは瞼を開いて辺りを見回した。
一面の暗黒……しかして、自分の体を見やると、その色と形ははっきりと確認出来た。
更に、自分の体を見る過程で、足下に地面が無い事に気が付いた。
浮遊している。飛んでいるとは違う……波間に漂うクラゲの様に、一面の暗黒空間の中で宙づりだった。
「不思議だ……」
あまりにも不思議で、言葉にすらしてしまう。と、そんなタケルの視界の端に、同じように浮かぶ……やよいの姿を見つけた。
「串木野さん！」
気絶しているのだろうか？　目をつむり漂っている彼女に、どうにか、近づこうともがく。だが、一向にその距離は縮まない。宇宙空間と同じである。推進力が無ければ任意の方向には進めない。
つまり――

「……そう、貴方はぁ……無防備ってことぉ」

耳元に不意にかけられる声。
それは、今、目の前に広がる闇の様に黒く、深く、ねっとりと、粘つくような不快な感覚を……タケルに味あわせる。
だが、それ以上にタケルを困惑させたのは……その声は既知のものだったからだ。
タケルは首だけで後ろを振り向いた。
だが、そこには誰もいない。
「あははは！　どう？　私の脳味噌とろけちゃいそうなＡＳＭＲはぁ？　特別だぞ？」
今度は、前から声がした。タケルはゆっくりと正面を向くと……。

「こんぱんぱかぱーん！」

配信開始のお決まりの挨拶――濃いピンクの髪に、白を基調としたギリシャ風の布服。
頭部に、雌山羊の角を備えた二次元の少女。
「巻髪ぱんなだよ！」

――巻髪ぱんながそこにいた。

「……いえ、貴女は巻髪ぱんなではありませんね。正体を表したらどうですか？」
「んんー？」
だが、彼女が名乗ってから、コンマ数秒と経たないうちにタケルは目の前の相手を――否定した。
「ちょっと、ちょっとぉ！　ひどすぎじゃない？　私は正真正銘の巻髪ぱんなだよ？　かなしいなぁ……」
しくしく……と、両手で顔を覆う。だが、それは誰の目に見ても、明らかな嘘泣きだった。
タケルはその様子を平坦な顔で見つめている。
それから……
「……いいえ、違います。本物の巻髪ぱんなは彼女です」
彼は宙に浮かんでいる串木野やよいを指さした。
目元に当てる手――指の隙間から、山羊特有の縦長の瞳孔が彼を見つめる。
「……んんー、どうしてそんなコト言うのかなぁ？」
「簡単な話です」
タケルは両手で顔を隠した、巻髪ぱんなに告げる。
「……貴方の声からは、本当の巻髪ぱんな……彼女の配信の時のひたむきな努力さが感じられない。まるで、何かをあざ笑うような……ひどく、邪悪なものを感じる」

「……それだけ？」
「それだけです」
「……ふふふふ」
くすくす、という小さな笑いから徐々に
「アハハハハハッハハハハッハハハハッハハ！」
……呵々大笑と、ぱんなが黒い闇の中で大笑いする。その目元には、先ほどは流さなかった涙を浮かべて。
それは酷く、下卑た笑い泣きだった。
やがて、ひとしきり笑った後……目尻に溜まった涙を拭いながら、ぱんなはタケルを見つ

めた。
「いやぁ……本当に笑わせてくれるね……！　だから……」
――――ニンゲンは大好きだよ。
「やはり、貴方は……無断配信をした偽の巻髪ぱんな」
――デジタルモンスターなのですね。
すると、目の前の偽のぱんなの背中から、黒い羽が生えてきた。それはルーチェモンのものとは違い、羽毛の無い、蝙蝠のような漆黒の羽。
タケルに正体見たり――と、看過された彼女は下手に隠す気はなくなったのだろう。
……変化が始まる。
次は頭頂部、ぱんなの頭に備えられた山羊の角の形が変わった。細く、長い雌山羊の形状だったものが、丸まり雄山羊の形状へと変形していく。
そして、ぱんなの体が、風船のように膨れ上がっていく。
「ぱんぱんぱんな！　なんちゃって！」
「……」
「あれ？　おもしろくないですかぁ？」
冗談は見た目だけで十分だ。そんなタケルの冷たい眼差しが、偽のぱんなに突き刺さる。
「えへへへへへ。では！」
そうして……偽のぱんなの体は破裂した。
アイドルのライブで舞う色とりどりの紙吹雪をまき散らし、中から出てきたのは巨大な、二足歩行の山羊だった。
全体的なシルエットは、かろうじて人の形を保っている。だが、上腕部や腰回りが異常に細く、逆に手と太股が巨大である。
そのアンバランスさは、その黒山羊をやはり怪物と称するに値する存在である事を暗に物語っていた。
「これが私、巻髪ぱんなもとい……メフィスモンでーす♪」
メフィスモンと名乗ったデジモンは両手のひとさし指で、自分の山羊の顔を注目させるように、指さした。声と口調は巻髪ぱんなのままである。

「……」
「ねぇ？　どう？　どう？　おっそろしいでしょ？」
「……」
「ねぇ、何とか言ってってば鉄面皮くん？」
まるで彼氏に構ってもらえないから、気を引こうとするぶりっ子の様に、メフィスモンはタケルに語りかける。
だが、それに応える気配は無い。

――タケルは改めて、この状況を整理していた。

謎の暗黒空間に無防備な状態。しかも、自分だけでは無い。依頼人である串木野やよいも一緒だ。
そして、デジタルモンスターの出現。おそらくはこの空間に自分たちを引きずり込んだ張本人。
口振りや態度からして……タケルたちを弄ぶ気まんまんの――性根の悪さが透けて見えていた。
（……成長段階は分からない。だが）
マキがいなくなった段階で、自分たちをこの空間に引きずりこんだ事から――頭も回る。おそらくは、ギリードゥモンの件とは違い、突発的ではなく……時間をかけて進化を重ねた個体である事が否応なしに分かった。
（……とにかく、状況を確認しない事には始まらない）
タケルは胸ポケットにあるルーチェモンの入った『匣』を確認する。
カード型の機械の確かな厚みがそこにはあった。
良かったと、彼は安堵する。
この天使の入った機械を相手は見逃していたらしい。
ならば、いざとなれば彼を出して実力行使が出来るというものだった。
（後は……）

――ギリードゥモンの時と同じ様に、彼女ら、デジタルモンスター―を知る為に、観察せねばいけない。

たとえ……直感で相手が危険なデジモンだと分かっていてもだ。
いや、だからこそ、猶の事知る必要性がある。
デジモンは人外魔境の存在である。
その行動原理や起こす災禍は千差万別だ。

ただ、何も聞き出せずに『匣』で捕まえてしまえば……
どうして事件を起こしたかのか？
どの様な能力を使ったのか？
それはそのデジモン固有の衝動なのか？

――今後の対策に必要な情報が得られなくなってしまう。
それもタケルの……『組織』の仕事である。

それに……例え、性根が腐った相手であろうと……交渉が通じるならば……相手に何らかのメリットを提示出来れば素直に退去に及んでくれるかもしれない。

（それに加えて……）

メフィスモンの意識が……完全にタケルに向かうまで、このデジモンの興味を惹かねばならない。
今、タケルは空中に浮かんでおり身動きが出来ない。それは――背後で浮かんでいる串木野やよいも同じ。
もし、メフィスモンがやよいに意識を向けて……何らかの危害を加えた場合……状況はタケルたちの不利となる。
やよいを守る為に、ルーチェモンを回せば……タケルが無防備となり、攻撃されるかもしれない。そうすれば、彼は死に……想いのエネルギーを『匣』から届けられなくなる。そんなのは本末転倒だ。
故に……タケルはメフィスモンが完全に自分に攻撃をしかけるまで待つつもりであった。
その時こそがルーチェモンを解き放つ瞬間。

――何時でも、『匣』を起動出来るように、細心の注意を払いつつ――目の前の黒山羊の悪魔と対峙した。

「……貴女は、どうして巻髪ぱんなになっていたのです？」

まず、問いかけるのはそこからだ。
何故、この、メフィスモンとやらは、巻髪ぱんなになったのか？
無断配信をした理由は何なのか？　それを知らねばならぬ。
「う～ん？」
「どうして、貴女は……この人を選び……巻髪ぱんなになりきっていたのですか？」

タケルは冷静にメフィスモンに問いかける。
黒山羊はしばし、頬杖をついて思考する仕草を見せた。
「ふ～ん……ずいぶん、つまらない事を聞くんだね。お兄さんは」
――すると、ひゅっと、タケルの頬を掠める炎。じりと肌に鈍い痛みを感じる。
どうやら火傷を負ったらしい。だが、この程度で動じる彼ではない。
「……」
「へぇー、今ので驚かないんだ」
メフィスモンから、ちょっとした感心の声があがる。
叩けば鳴るおもちゃと思っていた相手が予想以上の胆力を見せつけた事に……少しだけ感動していた様子である。
「……でも、ちょっと生意気。自分の立場分かってるぅ？　貴方達は……私の魔術で、パソコンの中に作り出した空間にいるの。つまり、私の手のひらの上も同然……その気になればぁ……！」

――ぱぁん、メフィスモンの背景で花火があがった。

「って、感じで綺麗な花火になっちゃうんだよ？」
「……」
「……口を慎めよ、ニンゲン？」
けらけら、と笑う。その姿はまさしく悪魔。
彼女にとって人間は叩けば音のなる玩具程度の価値しかない。
ここにきて、再び、人外の恐ろしく、また論理を逸脱した価値観を見せつけられる。
だがその程度の脅しで、自身を曲げる程、タケルは甘い男ではない。
「……そういう無反応なのもつまんなーい」
「……冥土の土産というものをご存じですか？」
「うーん……？」
と、ここでタケルが新たな方向性を切り出した。
「人は……ニンゲンは死ぬ前に、心残りが無いように……気になった事を聞く、という習性があります」
「……ふぅん？」
「それが冥土の土産……俺はその冥土の土産に貴女がどうして巻髪ぱんなになっていたのか……知りたい」
「つまり、それってぇ……死ぬから教えて欲しいってことぉ？」
「……はい」
――出来うるだけ消沈した意識を演出して、タケルはメフィスモンに懇願する――ふりを

した。
「……ふふ、あはははははは！　なら初めから、素直にそう言えばいいじゃなーい……！！」
その迫真の演技が功をそうしたのか、にたり、と、大きな口の端をつり上げて、メフィスモンはご機嫌となり……口を滑らせ、少しは語りそうな気配を醸し出す。
「いいわ。教えてあげる。私が、どうして巻髪ぱんなになっていたのかを」
強者の余裕を保ちながら、彼女はゆっくりと口を開いた。
タケルはその言葉――悪魔の身の上話に耳を傾けるだけだった。

――きっかけは彼女が私を喚び出した所から。

「喚びだした……？」
「そうよ。気付いたら、私は彼女のパソコンの中にいたの。まぁ、そこにいる本人は気付いてなかったろうけど……」
「……まさか」
――迷走期に行っていた『黒魔術やってみた』
その動画の内容について知っていたタケルは、まさかと……ある仮定を脳内に巡らす。もし、その魔術が、実は失敗しておらず、成功していたならば？
タケルは配信の内容を思い出す。中には召喚魔術も含まれていたはずだ。
それが、成功して……このデジモンを彼女のＰＣ内に召喚してしまったのか？
否、そうでなければ、この悪魔との接点はもてないはずだ。
「で、どうしようかなぁって思ってた。実体化するのも割にあわないし、呼び出された腹いせに……このＰＣの内部をぐちゃぐちゃにして出ていこうかなぁ……なんて、思ってた。でも」

――巻髪ぱんなの配信動画には、はたくさんの感情が集まっていた。

「一つの配信をやるだけで、何百、何千……時には何万もの感情があった。コメントを介してるから、薄味だけどね……でも、たくさんの量があった。だから私はそこの感情をちょいちょい……つまみ食いさせてもらってた」

――配信内のコメントに人の想いが間接的に乗るのか？
だが、ありえない話ではない。
タケルもぱんなのゲーム実況を見ている時に、彼女がなんらかの失敗をして『下手くそ』なんてコメントが載せられていたのを見た事がある。

自分はそれを読んで……彼にしては珍しく、ほんの少しだけ腹正しくなった。
それは……コメントに人の想いが含まれているからではないだろうか？
否……人の想いには一家言あるデジタルモンスターが言うのだから、配信動画のコメントに……少量だが、人の想いが乗るのだろう。
タケルはそう納得して、メフィスモンの話の続きに耳を傾けた。

「最初はね……それで良かったんだ。でも、途中から……そのコメントを直に喰らいたくなったの……だから、私が巻髪ぱんなになりたかった……そうしたら、ちょうど良いものを彼女は用意してくれたの」
メフィスモンは手品の様に――ぺらぺらになった、空気が抜けたような、あるいは天下の大泥棒が他人になりすます時に使うような……巻髪ぱんなの皮を取り出して、見せびらかす。
「これはね……『ＡＩぱんな』その外見……一見するとぺらぺらでかぶるだけのものだけど、ここには……そこのニンゲンの女が学習させた……巻髪ぱんなの音声の学習データが詰まってる」
つまり、メフィスモンが今の声、ぱんなの外見を手に入れたのは……声を学習させたＡＩを奪い、吸収したからということ。
「……本当に、楽しかった。コメントはおいしいし……潜んでいるような息苦しさも感じなかった……あぁ、こんなに生きてて良かったっていうのは……生まれて初めての感触だった……」
陶酔するように……うっとりとした眼差しで、ぱんなの皮を抱きしめる。
「うんうん……そしたらさぁ。我慢できなくなっちゃって……」

――その欲望は際限なく膨らんでいく。

「私が……巻髪ぱんなになって……！　あの子の変わりになれば……あのコメントは……ぜ――――んんぶ！　私のモノってわけぇ！」
「……それで、無断配信をしたわけですか」
「そう。でも、まさか、私の入ったＰＣの電源ごと抜くとは思わなかったわ。でも、あのニンゲンは戻ってくる……確信してたもの！」
メフィスモンはここで、更に口の端をつり上げた。
「だって、ぱんなに依存してるもの！　配信してるときもそうだった！　強い思いで、ぱんなになりきってた！　電源を抜く、その時だって！　ぱんなを返してって心の底から願ってたもの！」

そして――――笑った。よだれをたらし、くちゃくちゃと餌を貪る動物の様に……メフィスモンは笑っていた。
それは串木野やよいを滑稽だとあざ笑うものだった。
「……」
「ふふふふ、ところで、さっきから黙りこくってるけど……もしかして、未だ助けがくると思ってるのかしら？」
にちゃり、と口端を粘つかせて、タケルを見つめた。
「……」
「貴方はおそらく、もう一人のニンゲンを待っていたのでしょうけど、無駄よ。実体化しなくても、現実の世界に干渉出来るだけの力がすでに、私にはある」
メフィスモンが指をはじいて鳴らす。一つ、モニターが浮かぶ。
それは玄関先を映す、警備用のカメラの映像だった。そこには、ドアを何度も叩くマキの姿があった。
「聞こえてなかっただろうけど、さっき、チャイムが連打されてたわ。貴方達に何かあったと悟ったんでしょうね」
やがて、マキはドアを叩くのを止めると、玄関先で――ワゴン車から持ってきたであろう道具達を広げはじめた。
はんだごてに似た装置から、アタッシュケースに似た小型演算装置まで、その種類は様々である。
おそらく、電子的な工作……例えば、玄関のチャイムの回線から、こちらへ何らかの干渉を行おうと考えているのだろう。
「でも、無駄無駄……それに、ここが私の手のひらの上だって気付いていたみたいだけど……ここが、どこなのか、どういう場所なのか、気付いてないみたいだから、教えてあげる」
再び、指をはじいて鳴らす。
空中に三つのモニターが現れ、そこに先ほどまで、タケル達がいた、やよいの部屋を映し出している。
そこには部屋の壁、床、天井、ありとあらゆる場所に、幾重にも重ねられた幾何学模様――魔法陣が描かれている。
「ここはね……貴方達がさっきまで探っていたコンピュータの中。さっきネット環境を切っていたから、外部からスタンドアローンしている。干渉するのは無理。更に物理的な結界も張った……到底、あの女は間に合わないわ」
――メフィスモンは勝ち誇っていた。今にも鼻歌をうたわんとする位に上機嫌になっていた。
「と、ここまでが……今までの私。そして、ここからが、この後の私の計画」

そして、その太い指先をやよいに向けた。
「私は彼女を吸収して……串木野やよいとして実体化する」

そう、宣言する。
タケルは――そんな事が出来るのか？
と、半信半疑だった。だが、このデジタルモンスターの声を聞く限り……それは確実に出来るのだろう、という確信めいたものを感じていた。

それは、巻髪ぱんなだけではない。串木野やよい、その人生を乗っ取るという大犯罪の予告だった。
「今後はその女として生きる。そして、巻髪ぱんなとして、もっと、もーっと……楽しく生きてみせる。ねぇ、ところで……」
と、ここでタケルに再び、強い意識を向けた。
「取引しない？　貴方もこのお話……冥土の土産にするにはもったいないでしょ？」
「……どういうことでしょうか」
甘言を吐いた相手に、タケルは驚きもしなかった。
ただ、機械的に、業務的な返答をした。
「……簡単な話よ。貴方は私の今からする事を見逃せば良い」
「何だって……？」
思わずに、タケルは聞き返した。
「そう。私が彼女……串木野やよいになったなら、今、玄関先の女に『何も異常はありませんでした』って言えば、良い。私はやよいになりすまして……後は知らん顔。そうすれば全て綺麗におさまる」
「……殺人の手伝いをしろと？」
ここでタケルのさび付いた声に色が乗った。赤い、怒りの色。言葉尻も心なしか荒い。
「ちがう、ちがう……私が彼女を吸収するの。彼女はデータとなって、私の新しい形となって生き続ける……ほら殺人じゃないでしょ？」
「……」
――つくづく、自分は論理感の欠如したデジモンと出会うものだ、とタケルは内心ひとりごちた。

「違う。それは殺人です」

明確にきっぱりと……今まで黙っていたのが嘘なくらいに、彼は力強く言い放った。

その言葉の弾丸はメフィスモンを不機嫌にさせたようだった。黒山羊の顔故に、その表情は分かりづらいが、おそらくは怪訝な顔をしているのだろう。

「……何よ。貴方の命が助かるのよ？　自分の命が何よりも大事でしょ？　どうしてそこまで頑なに意地を貼るの？」

デジモンにとって自分の命は何よりも大事なものだという認識がある。だからこそ、自分の命をかえりみない、タケルの行動が信じられないのだった。

故に、私には分からない――目の前の、メフィスモンはそう言って、手のひらをタケルに向けた。そこには黒い雲が渦巻いている。

「これは私の必殺技『デスクラウド』の一部。これを受けたら……貴方はきっと、生きたまま腐食して……激しい痛みの中で泣きわめいて死ぬわ」

それはタケルに向けての最後通告。

だが、その甘さが――――。

「もう一回だけチャンスをあげる。首を縦に振りなさい」

「……貴女には何も分からないでしょうね」

「……そう、なら」

――おやすみなさい。

追悼と同時に、メフィスモンは暗黒の雲をタケルに向けて解き放つ。それは猟犬の様に、彼を喰い殺す為に迫った。

――だが……目的は果たした。

理由も聞いた。

犯行の手口も聞いた。

そして、これから行われるであろう……悪意の発露も理解した。

交渉が出来うるかどうか、その余地も考えた。だが、どう考えても……そんな未来は存在しない。

そして、最終条件――メフィスモンは今、タケルだけに意識を向けている。

このデジモンはこのままにしておけないと……タケルは胸元から白の『匣』を取り出して……守護天使を呼びだす。

「僕のパートナーに何しようとしてんだ！　このクソ山羊！」

闇が支配する空間に、白い光が迸る。それは一条の流れ星となって……暗黒の雲を打ち払い、黒山羊めがけて突進した。

「え……？」

ルーチェモンがメフィスモンの右頬を右手で打ち据えた。

「がっ……！？」

「ほんんんっんと！　何してくれやがったんだコノヤロー！」

更に追撃。左手で渾身のストレートを放つ。メフィスモンは吹っ飛び、暗黒空間の端へと追いやられた。

ざまぁあみろ、とルーチェモンは悪態をついた。

「っ……タケル！　大丈夫！？」

それからルーチェモンは急ぎ、タケルの元へと飛び寄る。心配のあまり、少し血色が良くないように見えるのは気のせいだろうか？

否、この暗い空間だからこそ、その顔が余計に白く見えるのだ、と……タケルは己に言い聞かせる。

「……いえ、大丈夫です」

「……ほんとう～？」

疑り深い天使は、じろじろとタケルの体をなめ回すように見てくる。数刻の後、ようやく本当に無事であるかを確認すると、はぁ……良かった、と安堵の溜息を漏らすのだった。

「ぐああ……これは……神聖系の……？」

一方で、メフィスモンはルーチェモンに殴られた両方の頬を――まるで虫歯が痛い子供の様に押さえつつ、この痛みの原因に思考を巡らせた。

「つ……まさか……！」

――メフィスモンは確認を怠っていた。マキが追い立て役であり、伏兵が別に存在することに。

だが、それは仕方の無い事とも言えた。ＰＣ外に干渉出来る力があるとはいえ、実体化していない以上、外界から入ってくる情報は三つのモニターから見える視界だけである。

タケルは……というよりも彼が追い立てようと身構えて用意していた『匣』の存在は……死角だったのだ。

「だから……」

自分の落ち度ではない、と体勢を立て直す。

そして敵対者を視認した。

そう――ルーチェモンの姿を。

「え……」

しかして、その姿を見た時、彼女は言葉を失った。

頭に浮かぶのは疑問符。

何故？　何故？　何故？　何故？の応酬。

「何故ですか⁉」

たまらずに叫んでいた……叫ばずにはいられなかった。

そう、あの姿は――――。

「……ん？」

そんな疑問を投げかける叫び声に反応して、ルーチェモンはメフィスモンの方を見た。そこには体が驚愕にうち震える、黒山羊の姿があった。

それから、先ほど見せていた女性らしい振る舞いにもとづく、柔らかな口調を投げ捨てて……

「何故ですか‼『魔王』　何故、貴方様が人間の味方する⁉」

と、激高していた。

『魔王』……誰のことそれ？」

――ルーチェモンはその言葉を受けると明らかに、テンションが下がっていた。あのメフィスモンの言葉に、何か害するものでもあったのだろうか。

わざと、　至極どうでも良いという雰囲気を醸しだし、その単語を敢えて無視するかのような……態度だった。

「誰の事！？　貴方様のことですよ‼　ルーチェモン⁉」

だが、メフィスモンの詰問はやむところが無い。

「いいえ、何度でも言います。貴方様は我ら、魔を司るデジモン達を統べる、王の一柱‼　それが何故、この様な場で……ニンゲンの味方をしているんだぁ⁉」

激情のまま、メフィスモンがつっこんでくる。先ほどまでの余裕ある……巻髪ぱんなとしての振る舞いはどこにも無い。ただ、獣のように――もとから黒山羊という獣ではあるが――ルーチェモン側につっこんでくる。

「……うざったい」

それは冷たい眼差しだった。もし、その視線に温度があるならば……絶対零度を記録する事は間違いない。

それほどまでにルーチェモンはメフィスモンを軽蔑していたのだ。

突撃してくるメフィスモンに……ルーチェモンは白く、光るエネルギー球を――一度に三発ぶち当てた。
「ぎぃ……！」
「……言っておくけど、ぼくだけじゃないぜ？　お前の事を許しはしないって……憤っているやつは」

――タケルは『匣』を通して念じる。

交渉に応じないのは薄々分かっていた。だが、タケルはこのデジモンの手口を分析する為に、敢えて耳を傾け続けていた。そうして、このデジモンの邪悪さを再確認した。
そして、ルーチェモンを解き放った時……珍しく、胸の内側で広がるものがあった。

この邪悪に対する、怒り――――許してはいけない、という気持ち。

元来、冷静沈着を貫き、感情をあまり強く持たないように生きてきた彼にしては珍しい事である。
「いいよ、タケル。その想いは全部……僕が昇華してやる」
ルーチェモンの身体が……ギリードゥモン戦以上に輝きを増した。『匣』を通して伝わるタケルの感情が、予想以上にあらぶっている事のあらわれだった。
そして、熱エネルギーの塊が形成される。
だが、前回の依頼（ギリードゥモン戦）よりも……タケルの感情が大きく膨れ上がっている事もあり、ルーチェモンが扱えるエネルギー球は数を増していた。
その数にして五つ。
並大抵のデジモンであれば、これだけあれば十分であろうエネルギー量となった。その五つの輝きが闇に浮かぶメフィスモンの輪郭を浮かびあげる。
「……もしかしたら、今回は消滅させてしまうかもしれないけど……良い？」
ルーチェモンはタケルに投げつける事前にそう聞いた。
タケルは力強く首をふり、肯定の意志を見せる。
「了解」
短く了承の意を口にすると、彼はその五つのエネルギー球をメフィスモンへと投擲した。
「……お前はルールを……人間側の倫理を逸脱しすぎた。共存は望めないし、『匣』に閉じこめておくには危険すぎる……そう、タケルが決めたんだ。僕はそれに従う」

冷酷に、無慈悲に告げる。黙示録のラッパを吹き鳴らす天使のように……審判を下した。

白熱の五球は、かくして黒山羊をその灼熱で焦がさんと飛来する。太陽に灼かれるイカロスの蝋の羽の如く、その身が――虚ろなるデータの身体が分解するだろう。
だが、メフィスモンはその五球に向けて、渾身の魔力を込めたのだろう……先ほどよりも密度の濃い暗黒の雲を放った。
だが、ルーチェモンのエネルギーは暗雲を霧散させ、メフィスモンへと直撃する。
瞬間、五つの光は爆発し、あたり一面は光に包まれる。
「やったか……？」
タケルはそんな言葉を口にする。そして、流れる硝煙の中を見た。
ぼろぼろになり――今にもデータの粒子になって消えゆきそうなメフィスモンの姿があった。
かの黒山羊は目を閉じ、荒い呼吸を吐いている。その姿は最早、息も絶え絶えという言葉が相応しい。
「……ふふ、どうやら、僕らの勝ちみたいだね。今回は手加減しなかったし……タケル、勝ったからご褒美を」
「……待ってください!!　ルーチェモン!!」
タケルは勝利の喜びを分かち合おうとして相棒に待ったをかけた。

タケルの目の前で、メフィスモンはその体を震わせて、目を開いた。瞬間、黒い翼をはためかせて、その場から一気に離脱したのだ。

「な……」
「あいつ……まだ、息の根があるのか!!」
物騒な物言いの後、すぐにルーチェモンは飛翔して、追撃の構えをとった。だが……。
空中で、見えない何かに衝突した。
傍目から見たら、出来の良いパントマイムに見えただろう。だが、ルーチェモンはぶつけたらしき鼻頭を押さえて、悶絶している。
「壁……？」
「あいつ……魔力の障壁を!!」
メフィスモンの仕業だと、確信する。だが、ここでルーチェモンを足止めする……その理由については検討がつかなかった。
そして、そのメフィスモンは逃避する飛行の中で――巻髪ぱんなの姿へと戻った。
「あれは……」
タケルはメフィスモンとは明後日の方向を見る。串木野やよいは未だ気を失っており、その身柄は無事だ。
（なら……どうして？）

何故、今になってぱんなの姿になったのか皆目検討もつかない。だが、わだかまりが、足下にぽっかりと空いた黒い穴に気づかないような……そんな不安感がある。
「あいつどういうつもりだ！」
ルーチェモンは壁を破ろうと攻撃を仕掛けているが、破れない。
それは持てる力の全てを振り絞った、と感じられる程の堅さがあった。

――事実、メフィスモンはその障壁に、残る己の魔力の全てを賭けている。

だが、それは逃避の為の、生存する為の投資ではない。
あのニンゲンの連れているルーチェモンに勝利する為の経路なのだ。
この、巻髪ぱんなに変身するのも――そのためだった。
ある程度距離を放したところで――メフィスモンは……空中に一つの光る枠を開いた。
それは先ほど、串木野やよいの部屋を映した三つのモニターに酷似している。だがそこには何も映ってはいない。　だが、メフィスモンの意識は、その窓の方へと向いていた。
そして、メフィスモンは――巻髪ぱんなは大きく、目の前で、手を広げた。

「こんぱんぱかぱーん！　巻髪ぱんなだよ！」

――それから、窓の向こう――配信サイトの視聴者へと挨拶をした。

◇9

「まさか……！」
「タケル、あいつ何やってんの！」
「配信です……けれど、このＰＣは」
ルーターの電源を止めている以上、ネット回線にはつながってはいない。なのに何故……と疑問を浮かべて、すぐに、タケルはもう一つ……ネット回線に繋がっている機材があった事を思い出した。
「串木野さんのスマートフォンか……！」
スタンドアローン状態であろうとも……どこかの携帯電話会社の回線に登録していれば、ネットには繋げる事が出来る。事実、やよいの出張用のスマートフォンは５Ｇ対応機種であり、それなりに強い回線強度を持っている。

そして、その狙いとは……。

――そう、貴方と同じように――ニンゲンの感情を利用する！

メフィスモンが後ろを振り向く。残る全魔力を込めた障害壁はいますぐに破られる気配は無い。後は慌てず……スマートフォンのネット回線を使い配信をすれば良い。
そして、同時にミラーリンクソフトで、ＰＣ側の映像をスマートフォンで共有する。

――それで配信を可能にしていた。

「みんなー突然の配信で驚いてるかなー？　巻髪ぱんなだよー？」
動画配信サイトのチャットのコメント欄には阿鼻叫喚もかくやという、視聴者のコメントであふれかえっていた。
『パンナ、パンナ、ナンデ！？』
『配信乙……あれ？休養はもういいの？』
彼女の登場に驚く声、休養を宣言していた為その身を気遣う声など、概ね好意的な意見ばかりだった。そのコメント――わずかばかりではあるが人の想いはメフィスモンの体を癒していく。

「ありがとねー、皆！　もっともっとコメント頂戴！」
偽のぱんなはもっとコメントを！　と催促を重ねた。そう、あのニンゲンがルーチェモンにした事と同じようにコメントのエネルギーを自分に注げば……回復は容易い事だろう。
そんな――絵空事をメフィスモンは考えていた。
だが、しかし――。

配信内容が思い浮かばなかった。

「あ、あれ……？」
前回の無断配信の際はやよいの近況をそれとなく語り、合いの手を打てばよかったので行えた。
だが、今回は話すネタが無い。
それもその筈だった。彼女はずっと、このＰＣの中で……しかも電源を切られていたのだ。外界の情報など知らないし、もとよりニンゲンの世界に対する興味が薄い。
さらに不味いことに……渾身の力を込めているとはいえ、魔術障壁はそう長い時間は保たない。
焦燥が、さらに頭の動きを鈍くする。
『どうしたのぱんなちゃん？』
『何か急に焦ってるけど？』
『黙ってるなら配信の意味なくない？』
そんな焦燥とは関係の無く、配信の画面で視聴者は……思い思いのコメントを打ち込む。
その呑気さが――――メフィスモンには非常に腹正しかった。
「っ……！五月蠅いよ！もっと私をほめたたえるコメントをしなさいよ！」

――――だから判断を誤った。

『急に何？』
コメント欄に不穏な空気が流れ始める。メフィスモンの……ぱんなの暴言に視聴者たちは……当然ながら、気を悪くし始めた。
『かなしみ』
『こんな暴言を吐くなんて……チャンネル登録解除します』
『そんなつもりで動画を見てるんじゃねーよ』
悲哀、失望、怒り。そんな感情がコメント欄に流れ始める。

――だが、メフィスモンにはそれはそれで好都合だった。

もうこの先、巻髪ぱんなとしてやっていけなくなるかもしれない。
だが、今、一時、力を得る為なら……誉めるコメントでもなくても良い。
だから、彼女はさらに煽る。火にガソリンを注ぐ様に……燃え上がれ、と願ったのだ。
「そうだよ！　ウジ虫どもが！　あんたたちは私の養分なんだから……！　貢ぐしか能の無い、ド低能どもめ！」
ドスを利かせて、視聴者たちに罵倒の言葉を投げた。
そしてコメント欄が燃え上がる。
『は？』
『ふっざけんな』
『これはゆるせん』
――得られる感情の量が増えていく、心身に感じるパワーにメフィスモンは、ほくそ笑んだ。
心身の傷が癒えはじめ……先ほどよりも、強くなる。そうすればあのルーチェモンですら、凌駕出来る……そう思い始めていた。
そう――そこまでは良かったのだ。炎上しているコメント欄に……
『ねぇ、本当に彼女は巻髪ぱんな……なの？』
という、コメントが流れてくるまでは。
誰かが、大河の中に一滴を投じた、そんな些細な感想だった。だが、そんな僅かな波紋は……またたく間に広がりを見せ始めた。
『たしかに俺も思った』
『そうだよな、やっぱり俺もそう思う』
『おまえは誰だ？』
『本物のぱんなちゃんをかえせ！』
いつの間にかコメント欄に溢れる言葉は……彼女の存在を否定するものへとすり替わっていた。得られる感情はある。だが、それと同時に……
「あ……あれ？」
メフィスモンは右腕に違和感を感じた。すると……腕が黒い、靄めいた状態に変化していた。
「う、嘘……！　ちが、これ……わたしの腕じゃない！」
コメントの彼女の存在を疑う意志が――イメージがそのまま彼女の身に反映しているのだ。

今までの言葉はあくまでも、巻髪ぱんなという形に向けられたものだった。だが、今は彼女では無い、ナニカ、別のもの、得体の知れないアンノウンに向けられたもの。

――形なきものであるがゆえに、人の感情は色濃く影響する。皆が共通の偶像を想像出来ない以上、その影響により形をとどめておけないのは自明の理と言えた。

――『デジモンにも人の想いは強く作用するエネルギーとなる。同時に、その時のイメージが強く作用する』

おまえは誰だ、という人々の感情が、彼女を巻髪ぱんな以外の何かにしようとしている。

「そ、そんな……！　違う、私は巻髪ぱんなだよ！」

必死に訂正の言葉を投げかける。だが、最早、彼女の存在を否定する流れは止まらない。

「ね、お願い！　私を信じて！　お願いだから！　じゃない、と私……私が私でなくなっちゃう!!」

変化は下半身にも及び始めていた。巻髪ぱんなのアバターが足先から黒い靄へと変化していた。

「いや……いやだ！　私が私でなくなる!!　そんな、なんで!?」

メフィスモンが後悔の言葉を叫んだ。

その脳裏には、何で……？何で？という疑問の言葉が浮かびあがる。それに対する答えは出てこない。

――自業自得だった。

彼女が侮っていた串木野やよい、彼女が今までどの様に配信していたかを知らない。

何にでも健気だった。たとえ、それがちやほやされたいという邪な思いだったとしても――妹の様に、一方的にもてはやされるのだけは嫌だったから、努力家だった。

そんな過去を知らない。積み上げてきた信頼を知らない。

一時、誤魔化せたとしても二度目は無かった。

だから、見抜かれたという事事実を――メフィスモンは分からない。

「わたし、わた、ワタシ……ハ、ダァレ……？」

その結果――何者にもなれなかった黒山羊は黒い靄となり、配信は強制終了となった。

その様子をタケルとルーチェモンの二人は遠目から見ていた。
メフィスモンがすべて、黒い靄になった時点で、障壁は文字通り霧散した。
「……」
「……まったく、ひやひやさせてくれちゃってさ！」
天使は悪態を付き羽ばたき飛翔する。そして、気絶している串木野やよいの身体を捕まえると、タケルのそばまで引き寄せた。
「さてと、全部終わったみたいだし……ここからどうやって出るか考えなくちゃ」
ルーチェモンはそんな呑気な事を言っていたが……タケルにはどうにも附に落ちない。
「どうしたのさ、タケル？」
「……本当に終わったのか？」
「だって、あいつは消滅しちゃったよ？」
――否、違う。
タケルは首を横に振った。
「未だ……終わってない」
「……えー？」
まさかぁ？　というルーチェモンの反応に対して、タケルの感覚は……まだ何かの気配をとらえていた。
メフィスモンはたしかに姿を消した。
だが、感じるのだ。それも、より濃厚で、強力な……まるで背中に氷を当てられたような、ぞくぞくする気配を。
「……あれは……」
そこで、タケルは気付いた。先ほどメフィスモンが消滅した場所に――未だに黒い靄が渦巻いている。
やがてそれは密度を増して――否、凝縮している。
「……おいおいおい」
ルーチェモンもその時点でようやく気付いたようだった。だが、すぐに手出ししようとはしなかった。
「ルーチェモン……？」
いつもは血気さかんなこの守護天使が、攻撃をしないで見に回っている。それだけではない。その表情から余裕……普段の彼が持つ生意気な態度がまったくと言って良いほどに消えていたのだ。
何かが、不味い。
得体の知れない力が――自分たちだけでは太刀打ち出来ないような何かが……生まれ来ようとしている。
そして、そんな予感は……すぐさま現実のものとなろうとしていた。

凝縮した黒い靄は一つの形態を取る。タケルにはそれが卵に見えた。
事実――それは卵なのだ。
――卵の中身というものは、未だ形となっていない、これから形を成す……誰でもない何かで満ちている。
だからこそ、何者であるか……と存在を分解されたメフィスモンはこの形になった。
コメントで膨大な人間の感情……エネルギーも得てもいる。
タケルがリボルモンに触れて、その恐れがギリードゥモンに進化させたように。
――イメージとエネルギーという条件がそろっている以上、それは……その黒い卵はメフィスモンが進化した存在。
黒い卵がひび割れる。そこから、赤黒い、錆びた血液にも似た液体が漏れ出したかと思うと、空中で凝固し、形を為していく。
まず二本の細長い腕。指はそれぞれが細長く、鋭利で鉤爪じみていた。二つの足も生えてくる。太く、逆関節で、どことなく恐竜の足を思わせる。加えて、太い尾にメフィスモンと同じ様なコウモリを思わせる羽も生える。
最後に、卵の中央に、鰐の如き、巨大な顎を持つ頭が形成される。その頭には眼――ぎょろり、と獲物を探す肉食動物の様な視線を持つ――が二つ以上、無数に存在していた。
「デビタマモン……突然変異型の……『究極体』」
――それはデジモンの最終進化段階。
ルーチェモンが忌々しげにその名前を呼んだ。その表情から、状況は非常に芳しくない事を告げている。
「ワタシハダァレ……ワタシハダァレ……」
その声は、ぱんなの声と似ていた。だが、擦り切れている。ところどころにノイズが走り、聞くものに不快さを呼ぶ声だった。
そして、その呪詛にも似た響きを放ちながら、周囲を無数の眼でぎょろぎょろと見回す。
やがて、呆然とする……タケルやルーチェモンを捉えた。
「ワタシハダァレ……ワタシ……ハ……」
瞬間、声が止んだ。

一瞬だけの静寂が辺りを包む。
それから――――
「オシエロ！　ワタシハダレダァ！　オシエロォ！」
全身から、暗黒のガスを放つ。
デビタマモンの必殺技『ブラックデスクラウド』相手の視界を奪い、精神を蝕み、ゆっくりと分解していく邪悪なる魔法の技。
それがまるで火砕流のような勢いで、タケルとルーチェモン……そして、串木野やよいを包んだ。

◇10

深い、闇の中、彼に声が届く。

――オシエロ、オシエロ。

それは深い、渇望の感情を秘めた声だった。自分が何者でもない。だから、自分の正体を、誰かに求める声だった。

――オシエロ、オシエロ。

闇の中で漂う、彼もまた、自分を見失いかけていた。

記憶があやふやで、不連続で――波に晒されたら、解けて消えてしまいそうな……砂の城めいている。

――オシエロ、オシエロ。

何度も、その声は反芻して響く。そこに彼は……ひどく共感を覚えていた。

何者でもない悲しさ。

自分自身が分からない……ゆえに世界に対する、自分の立ち位置が不明で……嵐に飲まれた帆船のように、孤独であった。

……孤独……それは嫌だな、と、彼は思う。

あぁ、そうだった――かつて、彼――井納武（いのうたける）は孤独だった。

彼には視えていた。

他の人には見えない、何かが見えていた。

視界の中に、得体の知れない靄（もや）の様なもの。実体は無く、そこだけ空間が歪んでいるような……とにかく、形容しがたい現象が彼の眼に映っていた。

物心付いた頃、そのことを親に話した。

てんで相手にされず、それでも、ずっと訴え続けたら、脳の病気を疑われた。

当然ながら、検査を受けてもなんの異常は見つからず、叱責の後に、気味悪がられた。

友達にも話した。

信頼していたが、待っていたのは縁を切られる、という無情の結末。さらに、始まったのは彼を除け者にし、あらゆる遊びの場から追放する仕打ちだった。

――ならば、その眼に映る、不可思議な何かを確かめようと接触を試みた。自分なりに原因を探求し、解決しようと子供ながらに意気込んだ。

だが――彼は思い知らされる。

タケルの――古い記憶の底、原初的恐怖。

眼に映った靄らしき異常、それに近づき認識し触れようとした。すると……その靄は形を変えて、明らかに何かを掴む形となり、突如、タケルの手を力強く引いた。

ひぃ……と口から恐怖の声が漏れ出た。涙が零れ、泣き叫びそうになった。

そして、真の恐怖はここからだった。彼が、涙をこぼす度に……その靄は明らかに……実体を得ていくようになった。

形無き、曖昧模糊な空間のゆがみは……確かな実体を持ってタケルの手を引く。それは自分を、ここでは無いどこかへ連れて行こうとする。恐怖の手だった。

……タケルは子供ながら、全身全霊をかけて、その手を引き離した。そして、一目散に……その実体を持ちかけた靄に背を向けて、走り、逃げた。

それ以降、彼は……目に視える異常に近づこうとは思わなかった。

そして、直感ながら……自分の感情があれに実体を与えるのだと気付いた時……彼は感情を表に出すのは止めようと誓った。

それ以降、彼は……ずっと孤独だった。

自分の様に世界を見る者はいない。

親にも友達にも……誰にも共感は覚えてはもらえない。

感情を出してはいけないルールを敷いたから……誰に対しても冷たい奴だと非難される。

そんな、心が停滞していた人生を――二十年間、続けて来た。

鉄面皮は板に付き、心を持たず、他人との協調性を失った精神は――現代の社会で生きていくには、少しどころか、大分、難があった。

その日も――他人とのコミュニケーションで下手を打って、パートをクビになったところだった。

「……」

パート先のスーパーで、同僚だった若い人妻から関係を持ちかけられそうになったから、断った。

すると、ある事と無いことをでっちあげられて、居場所が無くなってしまった。

で、誰かが犯した業務上のミスを……ちょうど良い身代わりとして、擦り付けられて解雇された。

反論はしなかった。あの場所に思い入れはないし、これ以上、自分がいても、もつれるだけだ……と潔く辞める事にした。

――そうだった、と彼は思い出す。

あれは冷たい北風が吹く、クリスマスも近い、冬の寒い日。

生きている以上、金はかかる。ゆえに、身にしみ入るような寒さの中、求人広告を探しに街にでている時だった。

「……」

時刻は夕暮れ時。

時節と場所故か、街には微笑ましい親子連れや、カップルの姿、あるいは友人等とはしゃぐ学生の姿が目に映った。

それに対して、微笑ましいとも、うらやましいとも思わない。

そこに何も感じはしない。

ずっと、そうして来たから。

でも、寒さが堪えたのか……ほんの少しだけ、それは良くない事だと――心のどこかで疑問が芽生えた。

何かを見ても、何かに触れても……なんの感情も抱かずにいたのならば……それは……。

――本当に生きている意味があるのだろうか？

「あぁ……」

白い息と共にため息が漏れた。

らしくない、と……頭を振って、心を殺す。

ずっと、そうして来た。出なければ、自分はあの恐ろしい何かに……と、考えていた時だった。

遠くで爆発音が聞こえた。

「……！」

空気が震え、頬に痛い程の風が吹き付ける。

さすものタケルも、それには驚きを隠せずに動揺する。だが、すぐさま平常心を取り戻し、冷静に周りを見回した。

群衆の顔は幸福そうな表情から一変して、恐怖におののく感情……ごく希に何かが起きたと好奇心にかられる顔が見受けられた。

だが、その後の行動は一律一緒だった。

その爆発は危険だと察知したのだろう。生物としての危機本能が待避を促していた。

「……」

そんな事を思いながら、タケルも避難の流れに乗ろうとした……その時だった。

――たすけて……

「あ……？」

声が聞こえた。

それは近くの誰かが発した声なのだろうか？　そう思って辺りを見回した。

だが、既に回りには誰もいない。

彼が一瞬の思考に囚われている間……蜘蛛の子を散らすように逃げ出していたのだ。

「……誰だ」

口にした後で……彼は右手の手のひらで、口をおさえてしまう。

自分にはしてはらしく……ない、と驚いた為だった。

――たすけて……

声は断続的に聞こえてくる。

季節には似合わない、春のそよ風が耳元を揺らすような感覚だった。

それをタケルは無視しようとした。

説明の付かない事象に首をつっこむ事は……過去の恐怖から避けている。

だからこそ、感情を殺し生きている。いつもと変わらない……向き合わないで、この場から逃げ出せばいい。

――そう思っていたのに、足は声が大きくなる方向へと歩き出していた。

――たすけて……

やがて、早足……次に競歩、最後に駆けだしていた。

なんで？　と言う、疑問の感情が、何度も胸のうちにやって来ては隙間風の様に去っていく。

走る息は白く、冬の空に消えていく。

そうして、走る先が――爆発音がした方向だと気付いたころには……もう、その声が間近に聞こえた。

――そうして、タケルは天使に出会った。

それは街灯が点灯し始める頃だった。

人気の無い、光無き路地裏で、その天使は息を切らしながら地べたに座っていた。

背に白い八枚の羽、短い金髪と端正に整った顔。頭部に更に、二対の羽を備え、白い布で体を覆った――――傷だらけの天使。

「……」

その姿――客観的に見て、痛々しいという感想しかない。

だが、タケルの中で抱いた感情は……。それとは似ても似付かないものだった。

――美しい、と思った。

タケルに猟奇的な趣味があるわけではない。

彼はこの天使が……自分が人生の中で見続けて来た、あの不可思議で恐ろしい靄と――同じ存在であることが何となく分かっていた。

だからこそ、今まで形を為していなかった何かが……こんなにも素晴らしい、天使の造形をしていると思っていなかったが故の感想だった。

同時に、もし傷ついていなければ……もっと美しいのだろう、という感想も抱いていた。

「何、見てんだよ……おまえ」

天使は力無く、タケルの方を見ると、青ざめた顔で悪態をつく。

流暢な日本語である。イントネーションは完璧。外国語には疎いタケルの耳でも確かに聞き分ける事の出来る――だが、そんな不可思議はどうでも良い、とタケルは天使の側にゆっくりと近寄った。

「……近づくな」

天使はそんなタケルに制止を呼びかける。すると、タケルは我に帰ったように、歩みを止

めた。どうやら、天使に近づいたのは無意識故の行動だったらしい。
「そうだ、それで良い……そのまま回れ右して、この場から去れ」
天使はタケルにこの場から去るように促した。だが、彼はこの場から立ち去ろうとはしなかった。
「……おい」
「大丈夫か？」
――不意に、そんな言葉がタケルの口から出た。
「……これで大丈夫そうに見えてるなら……相当、やばくない？　目、大丈夫？」
当然の感想だった。
「……配慮が無かったのは認めます」
「了解、りょーかい……で、君はなんで僕の言う通りにしないのかな？」
「それは……」
言葉に詰まった。今までの自分ならば何の感傷も無く、離れていただろう。だが、今回ばかりは勝手が違う。

――美しいと思った、その天使を……どうしても放ってはおけなかった。

だから、踵を返す事が出来ない。
こんな事は、初めてで……だからこそ、タケルも自分の行動に戸惑いを覚えている。
どうしようもなく……感情的になっている自分がいる――と自覚していた。

……そうして、どれくらいの時間が過ぎただろうか？

「おやおや？　どちら様ですぞ？」
路地裏の奥から――白衣を着た、派手な髪型の女が現れた。
「……あーあ、怖いやつがきちゃったな」
「ふぅむ……あれだけやっても、それで済むなんて……やはり、噂にたがわぬ実力の持ち主、これは、やはり……封じるよりは消滅させた方が、後の世のためですな」
金髪に黄色のメッシュを入れたその女は、獰猛な笑みを浮かべ――右手に、黄色のカード型の機械を手にし、構えた。
タケルには一体全体、何が起きているのか分からない。だが、このままにしておいたら、目の前の女性は……この天使を文字通り昇天させてしまうだろう事は……雰囲気で嫌という程分かってしまった。
「待ってください！」

タケルは自分でも驚くほどに大きな声を出して、女性を制止させた。
「君、退いた方が身のためですぞ。今すぐ回れ右をして、見なかった事にすれば……それで、君の日常は守られる。ここで見た事は夢、幻……そう思って、去るのがベターですぞ」
彼女は笑みを絶やさずに、タケルに忠告する。
天使と同じ事を言っていた。
それに対する返答は――
「……嫌です」
「「え？」」
天使と女性の声が驚愕で一瞬だけのハーモニーを奏でる。
「俺は……俺は……」
――こんな感情は初めてだった。人生の中で、虚無的な生き方の中で……初めての感動だった。
美しいと思えるもの、それに出会って、こんなにも心がうち震えるのは……もう二度とないのかもしれない。
だからこそ、この心の躍動を与えてくれた、この天使を……死なせたくない、と強く願っていた。
「だから、俺は……」
あの時、腕を掴まれた事を思い出す。
なぜ、それが頭に浮かび上がって来たのか、定かではない。けれども、そうしなければいけない……とタケルは確信していた。
だから、震える足で一歩……踏み出して、冷たい地べたに座る天使に駆け寄った。
――そして、その手を取った。
思ったよりも熱のこもった柔らかい手の感触がタケルに伝わる。
同時に――光が迸る。
それは後に知る事だが――タケルの助けたいという想いが天使に力を与えた。
傷は癒え、身体に活力が戻る。そうして、先ほどまでの死に体とは違い……完全に傷を回復した天使がその場に、光を携えて立った。
その光景は……タケルにとっては奇跡としか言いようが無いものだった。

「しまった！」
女性は手にした黄色の機械の表面のボタンを押そうとする。その表情は先ほどの笑みとは違い……明らかに焦っていた。
だが、何も起こらない。
と、言うよりも……直前で、その行動を止めたのだ。
なぜか？
「……それは何のつもりですかな？」
それは天使が両手をあげていたからだった。
「何って……君たちニンゲンの文化だと、こうすることで戦う意志は無いって……つまり降参だって表現するんだろ？」
「……どういう気の迷いですかな？」
「気の迷いじゃない。僕にはもう戦う意志は無い……」
さきほどよりも、若干しおらしく、声のトーンを落として答えた。
「ただ、少しばかり……お願いがある」
すると、天使は女性から視線を外し――タケルの方を見た。
「ぼく……このニンゲンのことがすきになってしまったみたいだ」
タケルはその言葉に――ぽかん、と口をあげて、声を失った。
これこそが、孤独の中にあった男の運命の出会い。

「そう、これがぼくとタケルの出会いだった」
闇の中で高らかに天使――ルーチェモンの声が響きわたる。
そして、暗黒のガスが霧散する。
それは奇跡の再現。
暗黒の空間の中に――一際、光り輝くルーチェモンが降臨した。
その両手にはそれぞれ、気絶しているタケルとやよいを掴んでいる。
そして、神々しい輝きは更に勢いを増す。
メフィスモンの時には五個だったエネルギーの光の球が、今は十個となり、太陽の様な輝きを持って、暗黒の卵の視界を焼く。
これこそがルーチェモンの必殺技『グランドクロス』の本来の姿である。
「あの時ほど……タケルも僕も感情がたぎっていた事は無い。だから、タケルに、あのときの事を思い出させてくれてありがとう……デビタマモン」

――これは、そのお礼だ。

十個の超熱光球が十字の形で、デビタマモンめがけて飛来する。灼熱のエネルギーは無限熱量を持って、暗黒の卵を焼き焦がす。

「オシエロォ！シエロォ！オオオオオ！」

熱エネルギーに苛まれ、悲鳴の如き声をあげる。

だが、そこはさすがに究極の力を得たデジタルモンスターだった。今まで以上の熱量を持ってしてでも――致命傷には至らない。

「……ふーん、これでも未だ足りないか」

特に驚きもしない。まるで、この未来を見越していたかのような。

「……なら、お前の言っていた『魔王』の力、解き放とうかね？」

そんな風に告げてから……

「なぁーんて……僕はもう『魔王』にはなれないんだよ」

笑みをこぼした。

◇11

「はっきり言って……本当ですかな？」
「僕は嘘をつかないよ。もう、タケルの守護天使なんだから」
「俺の……守護天使……」
――路地裏でルーチェモンと出会った後、紆余曲折あってタケルはマキと同じように、デジモンを調査し、彼らが起こす事件の解決を行う『組織』に入った。一応、区分としては公務員である。

「僕は彼が好きなんだ。彼が一緒にいてくれるかぎり、この世界に危害を加えない。彼の願うように生きる。そう決めたんだ」
――ルーチェモンは『匣』に入りタケルの相棒となる。そういう取り決めだった。
「……んー、めっちゃくちゃ今更ですが、イノウくん？　本当にこれで良かったんですかな？」
マキが両手を組んで、心底、悩ましげな表情を作る。ルーチェモンをという巨大な力をコントロール出来る反面、この怪奇な生命体が巻き起こす、様々な事件に彼の首をつっこませる羽目になるからだ。
それには当然ながら、危険が伴う。
「かまいません」
「即答！ですぞ」
「くふふふふ、タケルのそういうとこ、ぼくだいすき！」
ルーチェモンがタケルに抱きつく。伝わってくるのは感謝の気持ちだった。
彼は今、初めて自分の身に与えられたものが、何のためにあるのか――それが、自身の孤独を救ってくれた相手に役に立つと気付いて、心の底から嬉しかった。
「……きっと俺はずっと、ルーチェモンと出会った時の事を忘れません」

――そこには静かに、決意を固めた声があった。

「どこに行こうと、どんな人生が待っていたとしても……あの時の奇跡を……あの美しさを、この胸に抱いて生きていけます」
彼は――滅多に見せない笑顔を作った。

その時の事を、ルーチェモンは忘れられない。
彼は目の前で苦しんでいるデビタマモンに、聞こえていないだろうが――かまわずに語りかける。
「わかるかい？　彼はずっと…僕のこの姿、成長期のルーチェモンを心の底から美しい、と心に刻み込んでる。そして、その想いは……僕をずっと、この姿に留めているんだ」
――形なきもの、うつろいやすいものであるがゆえに、人の想いは強く作用する。
「面白いだろ？　すごいだろ？　本来なら、世界を滅ぼせるだけの『魔王』の力を……たった一人の人間が、押しとどめてるんだぜ？」
心底――嬉しそうに、身をよじる。それは悲鳴をあげているデビタマモンとは対照的だった。
「それに……それは僕にとっても願ったり叶ったりだ」
――僕は『魔王』になんかになりたくなかったから。
「だってそうだろ？……そうなってしまった以上、ずっと世界から迫害を受け続ける。そんなのまっぴらごめんだ。でも、それがルーチェモンとして生まれてしまった自分の……逃れられない定めだと知っていた。でも」
――それを変えたのだ。あの男、井納武（いのうたける）が。
「……ずっと逃げてきた運命から解放されたんだ。だから僕はもう」
――これ以上の事は願わない。
「愛しき守護天使として、タケルを護り続ける」
――そこには朗らかに、決意を固めた声があった。
「だから……彼を護る為に出来る事は何だってする」

すると、彼は――タケルを優しく、放し、空中へと浮かせた。そして、もう片方の手で持っていた、気絶している串木野やよいを近くに抱き寄せた。
「タケルの願いのエネルギーは僕を『成長期』に押しとどめている。だから、これ以上の力を得る為には……」

――他の人間の想いが必要だ。

「……言っておくけど、浮気じゃないからね」
懺悔して、彼はやよいの手を直に握った。

伝わってくるのは……変わりたいという想い、同時に付随する起源が……彼女の過去がイメージとして伝わってくる。
――本当は両親に愛されたかった。妹だけじゃなくて自分を見てほしかった。でも、それは叶わず……だったら有名になれば……芸能にでも身をやつして……そしたら両親も振り向いてくれるし……ちやほやされる――かもしれない。
アイドルになろうとしたけど、年齢的に無理だった。
声優になろうとしたけど、下心を見透かされて……演技力もないし無理だった。
パートで食いつないで……やけになってゲームにのめり込んだ。
そこそこの腕前になった時……ゲーム仲間に誘われて、とあるゲームの実況動画に出演した。
たまたまだった。でも、それで声を誉められた。
嬉しかった……それでいろいろと勉強して……自分で実況動画を始めた。思った以上に誉められて、チャンネルも登録者が増え始めて……ちょうど、そのころ……大手企業でＶＴｕｂｅｒを募集してた。私は意を決して応募した。面接を受けて、入社した。そこからいろいろと大変だった……けど、同期の同性の友達も出来た。本当にうれしかった……だから、もっと……

「……」

――可愛い自分になりたい。ただ、ちやほやされるだけじゃない、自分に愛を与えてくれた全てに恩返し出来るように……何かを癒せる……そんな自分になりたい!!

「……良い願いじゃないか」
ルーチェモンは呟く。そして、串木野やよいに宿る強い想いを、願いを……そのエネルギーを、自分の身体に通し、叫ぶ。

「ルーチェモン進化！」

その身体が更なる光に包まれる……そして、その中から新たなる天使が産声をあげる。

輪郭は女性。腰は細く、全体的にしなやかな印象。

そして、その身を包むのは、前が大きく開いた、純白のアイドル衣装。

ミニスカートにはフリルが付き、可愛いという印象を誰の目にも与えていた。だが、その印象とは大きく離れている箇所が一つ。

それは両手にはめられたガントレットだ。手甲とメリケンサックが一体化している。

「ラブリーエンジェモン！」

そのガントレットに包まれた両手を打ち合わせ、巨大な茶色のツインテールをなびかせて、ルーチェモン――もとい、ラブリーエンジェモンは名乗る。

「……へー。そっか、そっか……こうなるんだ！」

ラブリーエンジェモンは自分の姿を見回して、感慨深く呟いた。

それから……。

「さてと……そろそろ、終わりにしようか？　デビタマモン」

『グランドクロス』の炎で苦しむデビタマモンに向き直る。

「……いや、メフィスモン、君はコメントに耳を傾けるべきじゃなかった。君が真に想いを受け取るべきだったのは……」

――視線を宙に浮かぶ、串木野やよいに向ける。

「彼女だったんだ」

構える――それは空手の型で言う正拳突きの構えだった。

「さぁ、懺悔の時間だ。たまご野郎」

渾身の力を込めて――一気に跳躍する。ラブリーエンジェモンの身体が音速の壁を突破する。

やがて……光の速度に近づいた時……何故か、その身体が七色に光った。

――そっちの方がカワイイでしょ？

レインボーの流星となって、デビタマモンへと一直線へと突き進む。
これがラブリーエンジェモンの必殺技の一つ『マーブルインパクト』
七色なのに白黒なのは――決着（しろくろ）を付けるという彼女の意志の表れを体言している。

――デビタマモンはその光を、無数の目で見た。

「ア」

……それが醜悪な黒卵が最後に発した言葉。そこにどんな想いが込められているかは知らない。その一瞬だけは自分が何者であるか……そんな風に思い悩む事は無かった。

◇12

「……串木野さん、串木野さん」
「……あれ……はい？」
「仕事終わりましたよ」
そんな声をタケルにかけられて――やよいは我にかえる。
「あ、あれ……？　私？」
「……パソコンのウイルス駆除、終わりましたよ」
「え……」
目の前で、マキは荷物を仕舞いだして……帰り支度を初めていた。
「原因は……音声を学習するＡＩソフトに付いてきたウイルスですね。最近、こういうのが流行っているんです。学習した後、本人になりすます……こういう事例がごく少数ですが、国内で起き始めています。この件は貴女の事務所にも」
タケルは、やよいに事の経過――嘘の報告を早口で伝える。
一方で、やよいはルーチェモンの魔術が効いているため、一瞬、ぼーっとしていた……という認識だった。

――メフィスモンが起こした問題は全て解決し――何も知らずに彼女は日常へと回帰する。

「……最後にこちらにサインをお願いします」
偽の社名が書かれた書類をタケルはやよいに手渡す。
彼女は慌てて、机の引き出しからペンを取り出し――串木野やよい、とサインを入れた。
「それでは……大丈夫でしょうけど、また何かあったらご連絡ください。アフターサービスも、当社はちゃんと請け負っていますので」
「あ……はい」
そう言って――タケルとマキは、やよいの自宅を後にした。

「……あの人」

やよいはタケルの事を思い浮かべる。あんな風に喋る人間だったっけ？　と疑問に思いつつも……玄関先で見せた、微笑みに……何故か、心ときめくのだった。

◇
13

日は傾き、夜の帳が降りる。
マキはワゴン車をその小さなビルの裏側――契約駐車場に止めた。そして、裏口からビルの中へと入る。
ここはかつて地方銀行の支店があった場所。今はマキ達『組織』の拠点の一つとして利用されている。
マキは一階の明かりを付ける。
銀行時代の内装は撤廃され、今は他の一般的な会社のオフィスとさして代わり映えしない……デスクと椅子だけの空間となっている。だが、一点だけ、銀行時代の名残があった。
それは金庫室。
地方銀行の小型支店にしては珍しい――貸金庫用に地下室を設けている。
マキは階段を降りて、重厚な扉が設置された地下室へと降りる。
すると、そこには扉以外に、一つの作業机――その上に古風なダイヤル式の黒電話が置かれていた。
マキはそのダイヤル式の黒電話の受話器を持ち上げて、耳に当てた。
すると、番号を入力していないのにコール音が聞こえてくる。

そして――

「もしもし、『教授』そちらはどうですかな？」
『……メールでも受け取ったが。今回の件、改めてご苦労さまだ』
「いえ、私よりも……全部解決したのはイノウくんですぞ」
電話の先から――『教授』の声が聞こえてきた。
『イノウくんは？』
「……無事ですぞ。しかも、どうやら究極体に勝利した模様で……無様に醜態を晒していた自分が情けない」
『そうか……究極体を……』
受話器の先から感嘆の声が漏れた。それほどまでに今回のタケルの戦績が大きかった事を物語っている。
『……ルーチェモンの方は？』
「……一時、究極体にまで進化した様子で……あ、『魔王』の姿ではなく、とうやら別のデ

ジモンらしく……ただ、やはりイノウくんの想いの方が強いのか。成長期の姿に戻りましたな。一度、進化デジモンを元に戻すなどと……よっぽど、彼には成長期のルーチェモンの姿が好ましいようで」

至極、嬉しそうに笑顔で……彼女は『教授』に伝える。

『ツクモ、マキ……だが、わかっているだろうな？』

そんなマキの表情を見透かしたように……『教授』は諌める声を出した。

『二人を気に入るのは良い。だが万が一……ルーチェモンが『魔王』に進化した時は……』

「……わかっていますぞ」

――落ち着いた声色で、彼女は答える。

『なら良い……マキ『お目付け役』ご苦労だ』

「いえいえ……それも私の仕事の一つですぞ」

『引き続き、頼むぞ。また何かあったら連絡を……それでは』

そう言って……『教授』は電話を切った。

それからマキは重厚な扉、その前にあるコンソールにパスワードを入力して、扉を開く。中には無数の小型貸金庫の引き出しがあった。

それらのうち、一点の引き出しを開けて、その中身を見た。その中に入っていたのは青色の『匣』だった。

「さてと……次の依頼の為に、ちょっと調整しますかな？」

マキはそれを取り出すと、再び貸金庫の引き出しを閉じた。

◇１４

自宅の自室にて――タケルは今回のメフィスモンの起こした騒動の顛末が記載されたレポートを読んでいた。

まず、メフィスモンを呼び寄せた『黒魔術やってみた』配信内のありとあらゆる魔術は、危険と判断され、『組織』の隠ぺい工作により、その内容は全て、ネットから消去された。

それから……串木野やよい――巻髪ぱんな、は復帰した。

二度に渡って行われた無断配信は……音声学習用のＡＩに仕込まれていたウイルスが原因であり、事務所から公式に、ＡＩぱんなが遠隔操作をされていた事が報じられた。

疑う声はあったものの――彼女の人柄に似合わない暴言や、所作があまりにも多かった為、乗っ取りの件はおおむね世間に受け入れられた。

その為、彼女は世界で初めて、ウイルスによる遠隔操作を行われたＶＴｕｂｅｒとして話題になり、ある意味において時の人となった。

もっとも、本人はそんな目立ち方を望んでおらず……ふつうに配信がしたい、と復帰後初の雑談配信で述べていた。

そして、今日も……

「こんぱんぱかぱーん！」

と、明るい声で喋っている。

レポートの合間に、巻髪ぱんなの復帰配信を見ている。

タケルはこの挨拶が好きだ。

彼女らしい朗らかさに満ちていると……思っている。

「……こんな事を思っていると、ルーチェモンに怒られますね」

「……よく、わかってるじゃん」

胸ポケットに入れた白の『匣』そこから嫉妬深い天使の声が聞こえてきた。

「……すいません」

「うそうそ……分かってるよ。ぼくが、タケルの一番だって事は……十分承知の上さ」

「そうですか、それは何よりです」
それから、巻髪ぱんなの朗らかな声を二人して黙って聞いていた。
「……彼女、ぱんなはさ」
「はい？」
「……君ほどじゃないけど、すごい奴だったよ。ちやほやされたいって……気持ちはあるけど、人間としてすごいと思う」
何気なしにルーチェモンはそう呟いた。
タケルはその言葉に……目を丸くする。
「……なんだよ……あ、言わなくてもわかるぞ！　僕が君以外の人間を誉めるのがそんなに珍しいか！」
いや、そうだけれども……と言おうとした所で……タケルは思った。
――この天使もまた、少しずつ変わるのだと。
「……それもまた、美しいですね」
「ちょ、なんだよそれ、ちょっと、一人で納得するな！」
「いえ、何でもありません……言葉に対して、声が喜んでますよ。ルーチェモン」
「……タケルにはお見通しか」
「えぇ……そうです」
タケルは苦笑し、ルーチェモンは『匣』の中で苦笑する。
――孤独だった男は、守護天使と共に今日も、明日も……少しずつ、前に進んで化わっていくのだった。